北支

現地編輯



萬里長城

萬里長城は山海關から起り、燕山々脈大行山脈北部を匐つて黄河を渡り、オルドスを横斷し、甘肅省の肅州に至る五千四百四十支里、更に復壘を加へるとその延長一萬二千支里（二千里）に達する

これが築城は西紀前三四九年に魏の惠王が固陽（現在の綏遠省境、烏喇特旗）防衛のために築いたのにはじまり、その後諸國代々の王侯鋭意これを築き、有名な始皇帝が最後にこれを完成したのである

何故こんなにも大げさな城塞を設けなければならなかつたのであらうか

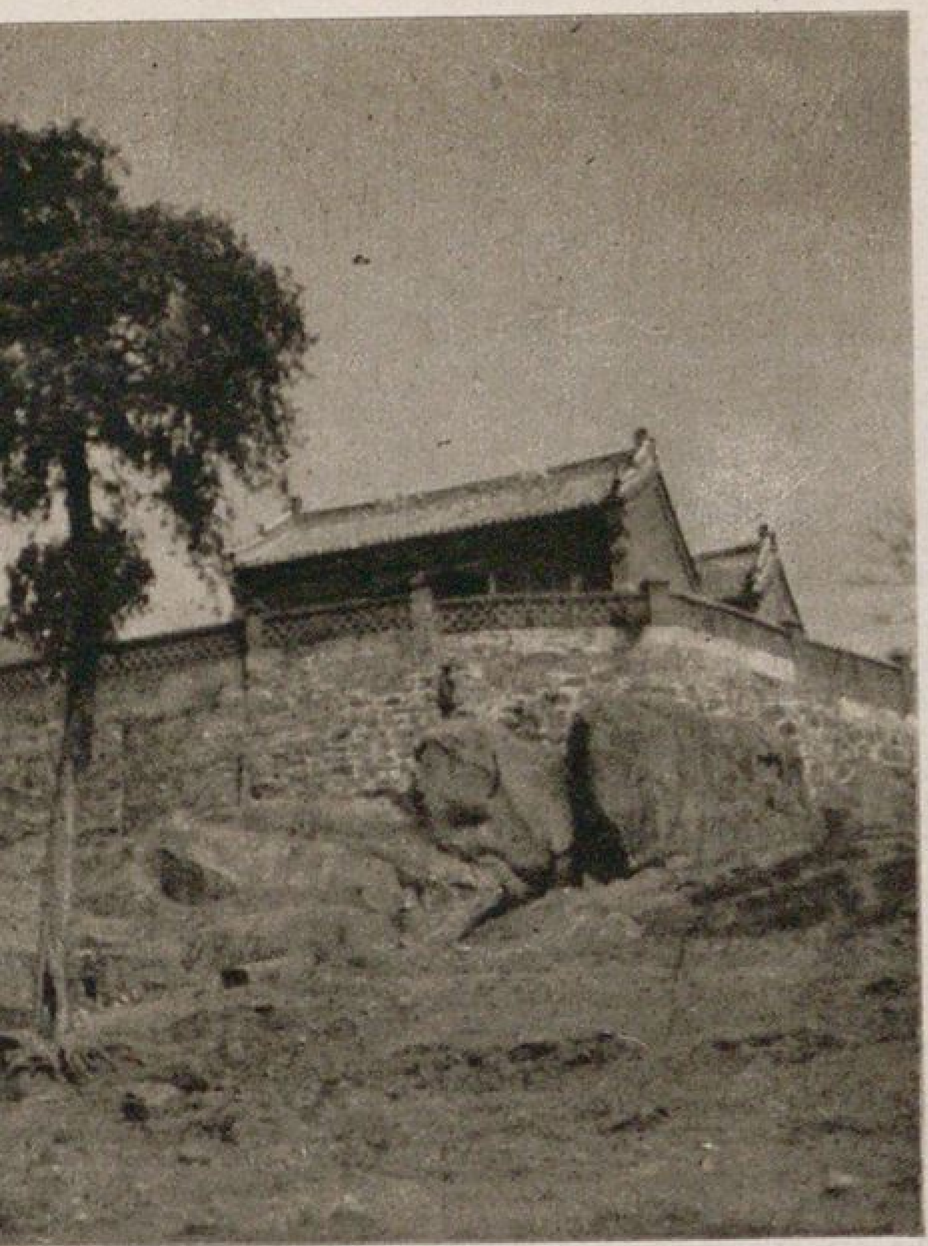
當時は恰も戰國時代であり、群雄割據し同族相喰んで國内紛亂の極に達し、外狄の侵入など顧る遑がなかつた。その間隙に乘じて北方の蠻族は國境をおびやかし、中原を窺つてゐた。それが戰國魏の時代に至ると、東方に東胡、山西北方には林胡、樓煩、陝西北部では緄戎、義渠といふやうな慓悍な戎が南侵の勢を示してゐた。さて、此の强敵をどうにかして喰ひ止めねばならなくなつて、案出したのが長城建設である。それは戰國時代も末期に近く、魏が築城したのにはじまり、次いで燕、趙、秦などそれぞれこの大城塞工事に國を傾けたのである

關の海から起る萬里長城老龍頭を望む



角山よりはるかに山海關を俯瞰する





城建設に因む彼女の純情悲話はすでに本誌でも紹介した



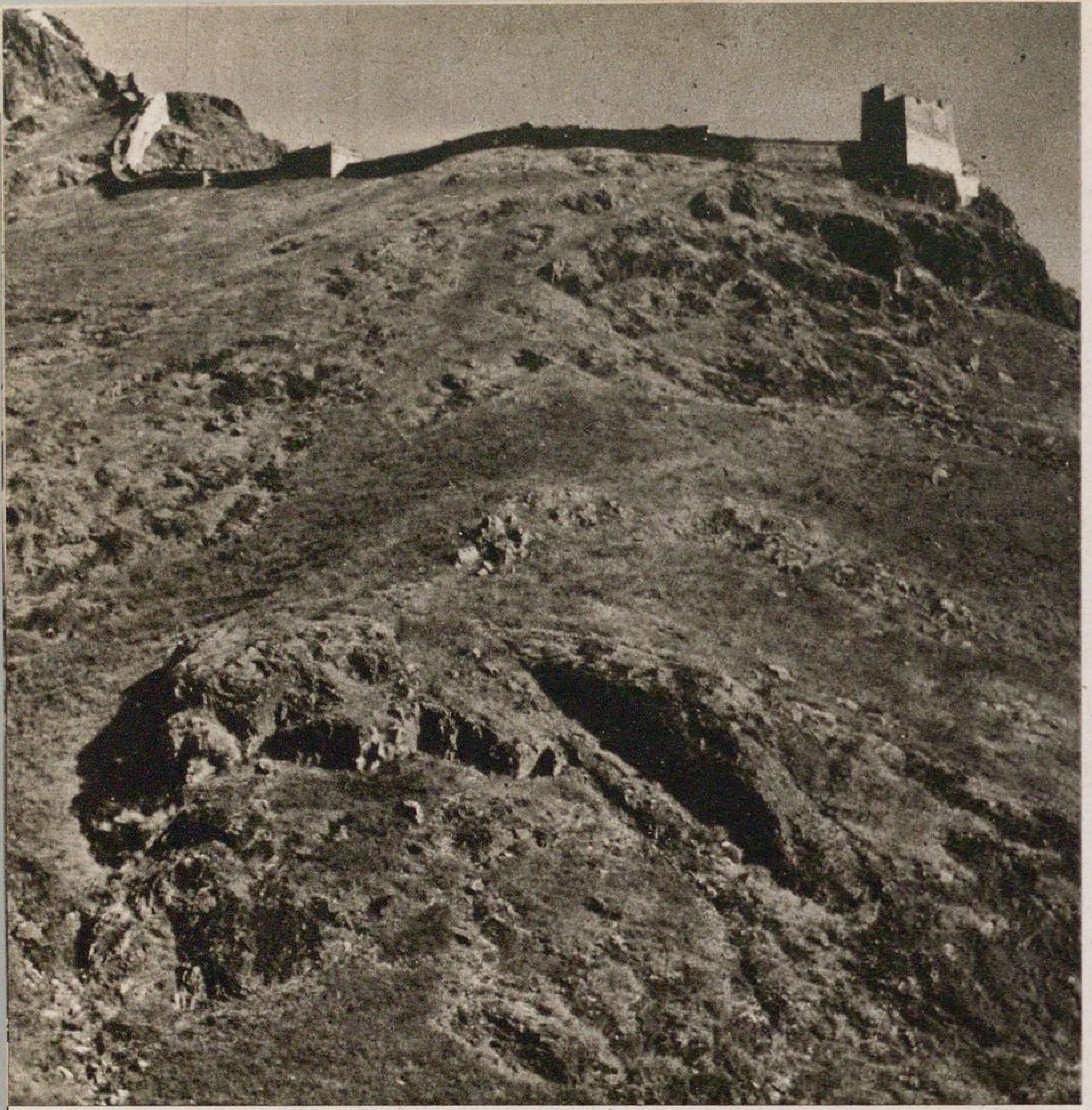
天下第一關、門から向うは滿洲國

角山寺裏姉妹岩より石河方面を望む



くらゐ努力と努力を必要としたかといふことは、試に古北口でも八達嶺で

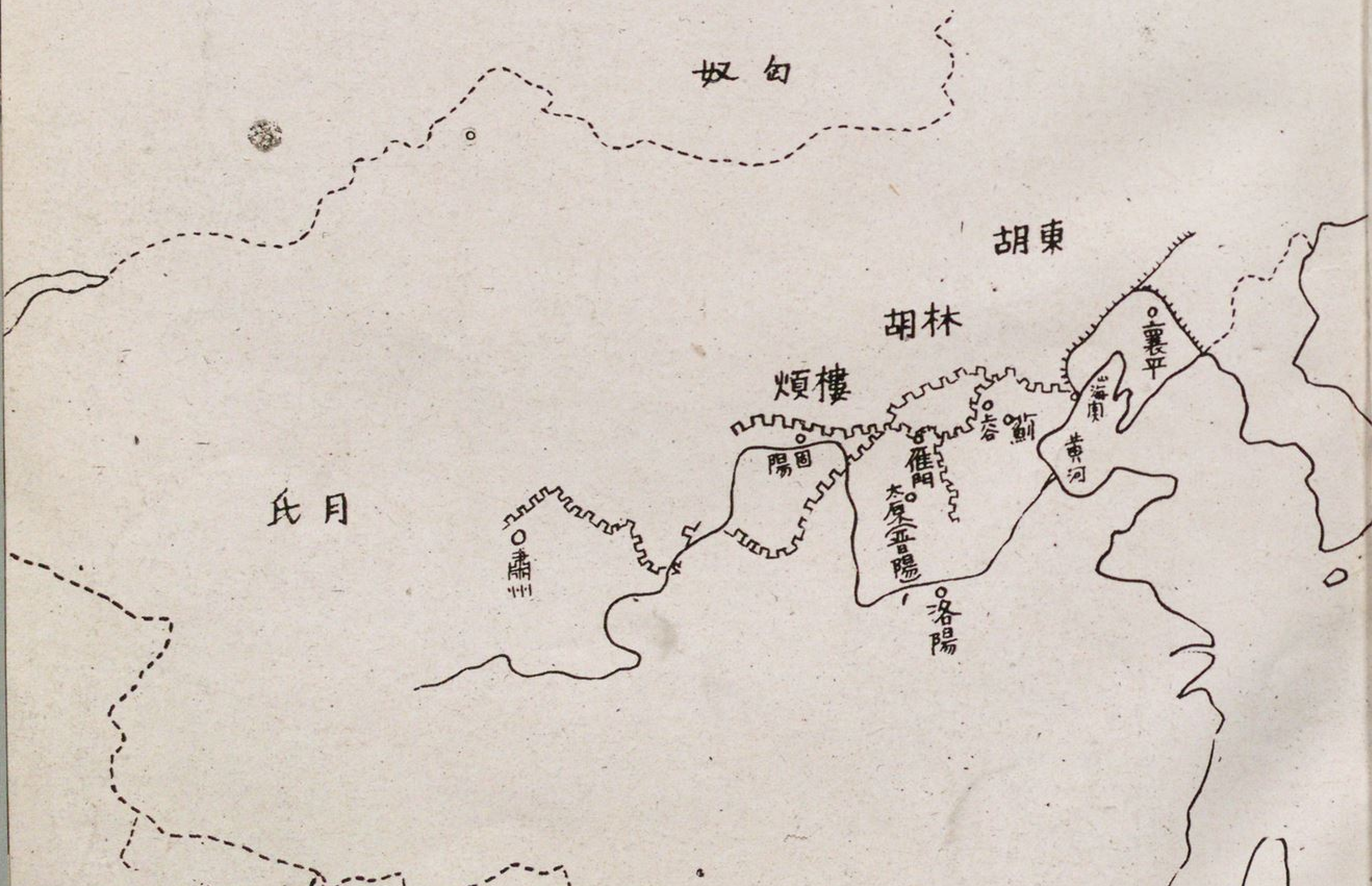
と連らなる峻嶮の頂上をそれは延々と怪龍のやうにのたうち巡つてゐる。昔



即ち甘肅東端から陝西北部に至る間は秦、陝西北部から黄河に至る間は魏、山西北部の大山岳地帯は趙、それ以東の燕山の山脈傳ひを燕が築いたのである。しかしそれは、今日見るやうな完(修理と云つても新築同様な勞力を要したのである)增築して完成したのはお馴染みの始皇帝である

始皇帝は天下を統一すると(西紀前二二一)長城の全面的完成といふ破天荒な大工事を計畫し、蒙恬といふ大將を總監督とし、老弱賦役幾百萬人を强制動員してこれを成し遂げたのである

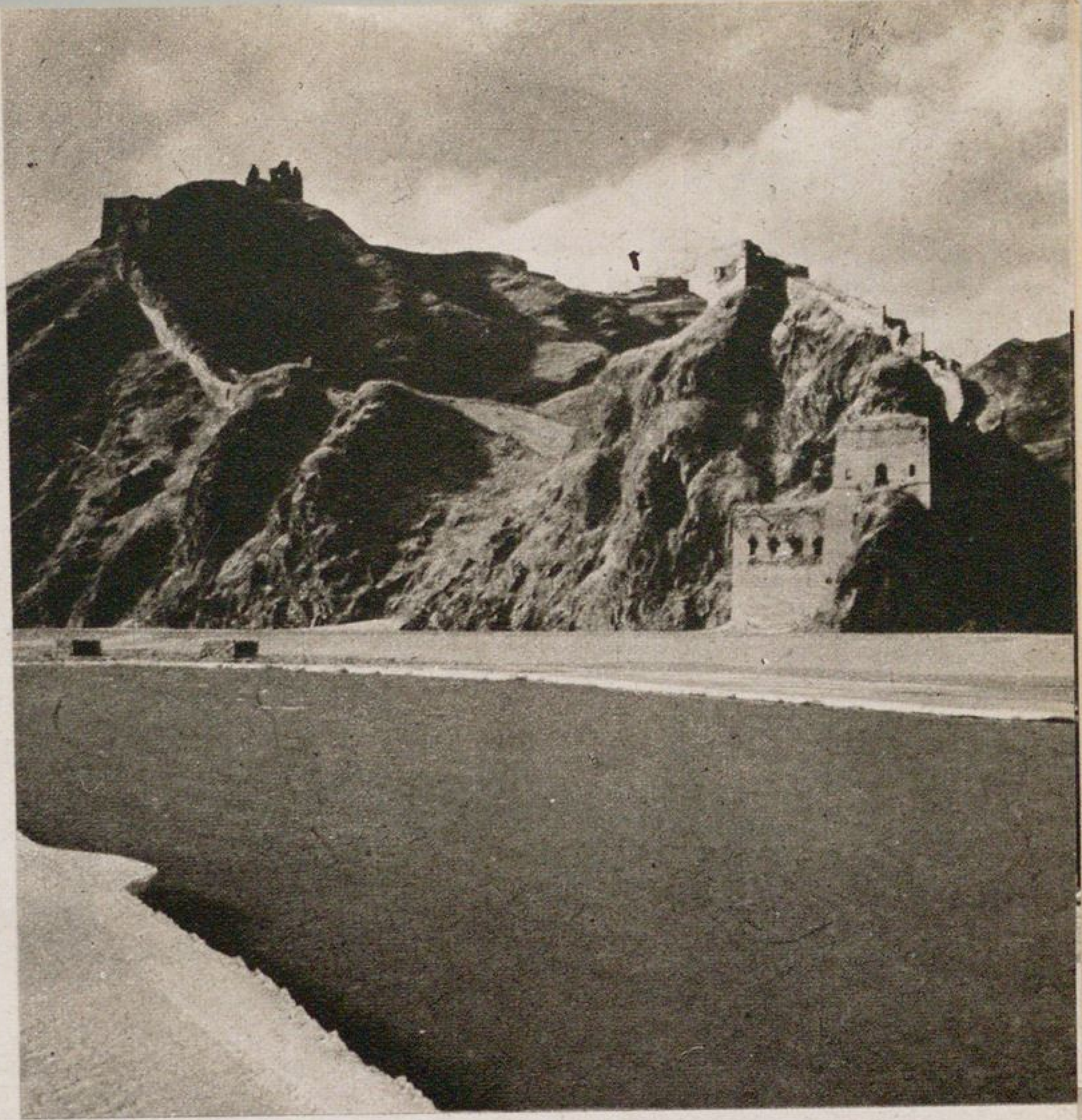
この工事が如何に難工事でありどれ＊



萬里長城 3

古北口

△る。始皇帝は敢てこれを成し遂げたそのため民の怨恨を買つたこともまた一通りではなかつたのである。更に慚愧に堪へないことは、總監督蒙恬將軍が城塹の地脈を斷つ能はなかつたといふので罪を得て、自殺してしまつた。そして、皇帝のかうした振舞にとやかくいつた學者連も逆鱗に觸れて四百六十人一時に生きうめにされてしまつたといふ。斯の如く始皇帝は暴君であつたけれど、こんな破天荒な大事業はこの暴君の威力無くしては或は完成しな



潮河と親子碉樓



たる長城を背にさゝやかな古北口は渓峪にあつて平和な街

成つたのである始皇はこれを以て萬代不易と自惚れたにも拘はらず、始皇死後は北方の形勢は俄然として一變した。卽ち前に邊地に移住せしめられ或は又邊境に戍役として派遣されてゐた者達は、もと／＼帝威に懾れて已むなく朔北に出役したに過ぎなかつたから、始皇の死を聞くや皆な思ひ／＼に自己の守備を撤して南歸した。此に於てか陰山方面の匈奴再び南下して河南に徙り、上谷以北の東胡も亦今の承德全境を併有して、夷狄の分布は又々始皇以前の狀態に復歸したのであつた

燕山の山々（獅子山より）



萬里長城 4

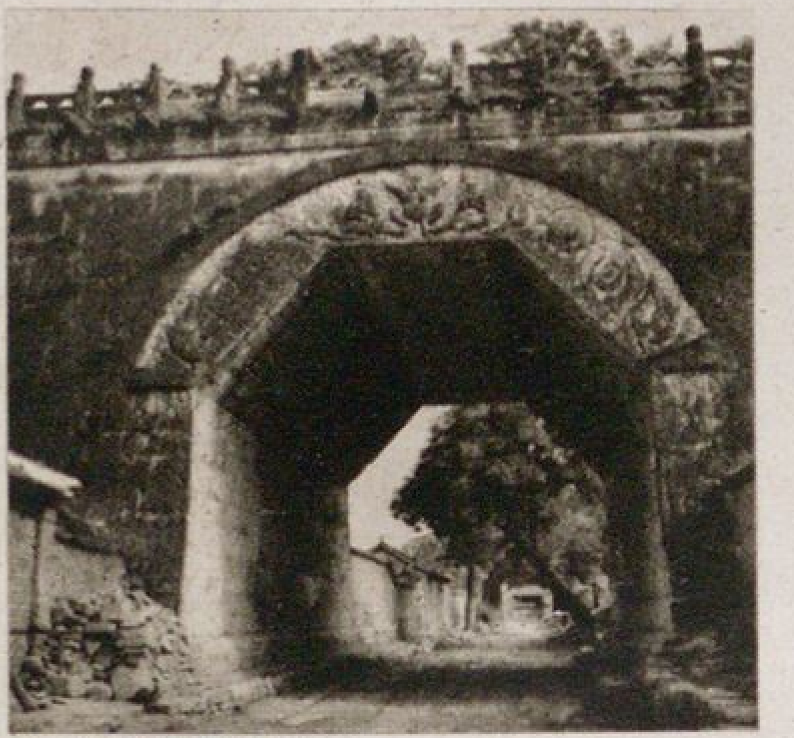
八達嶺



居庸關附近の芥子畠



八達嶺附近の柿畠



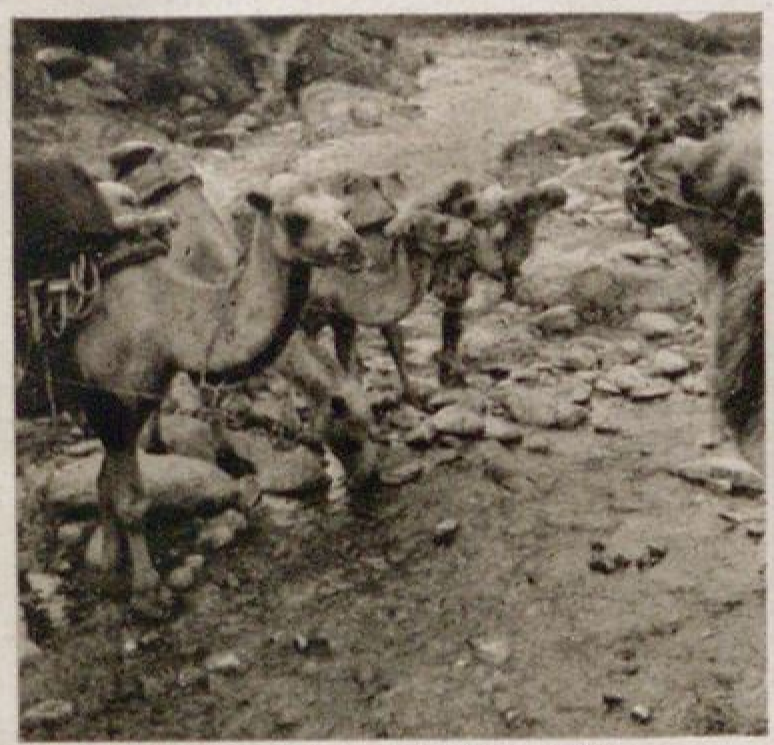
居庸關の雲臺

以來長城を中にはさんで、或は破り或は破られて漢民族と北方夷狄との闘爭は絶えずくりかへされてきたのである

さて、吾々は、萬里長城に立つてその壯大なる規模に驚いたのであるが、もう一度ふりかへつて、我々日本民族の成しつゝある現實を、考へてみようではないか

北は北極に近く南は南極を望む、日の丸の旗は地球の半分を蔽ひ皇軍の征くところ、住民は神兵と畏敬して心から我を迎へてゐる。始皇の暴威と皇軍の仁威、すでに雲泥の差ではないか。更に萬里長城など比較にならないほどの鐵壁の堅壘がその幾十倍かの構想の下に着々と我民族によつて完成されつゝあるではないか

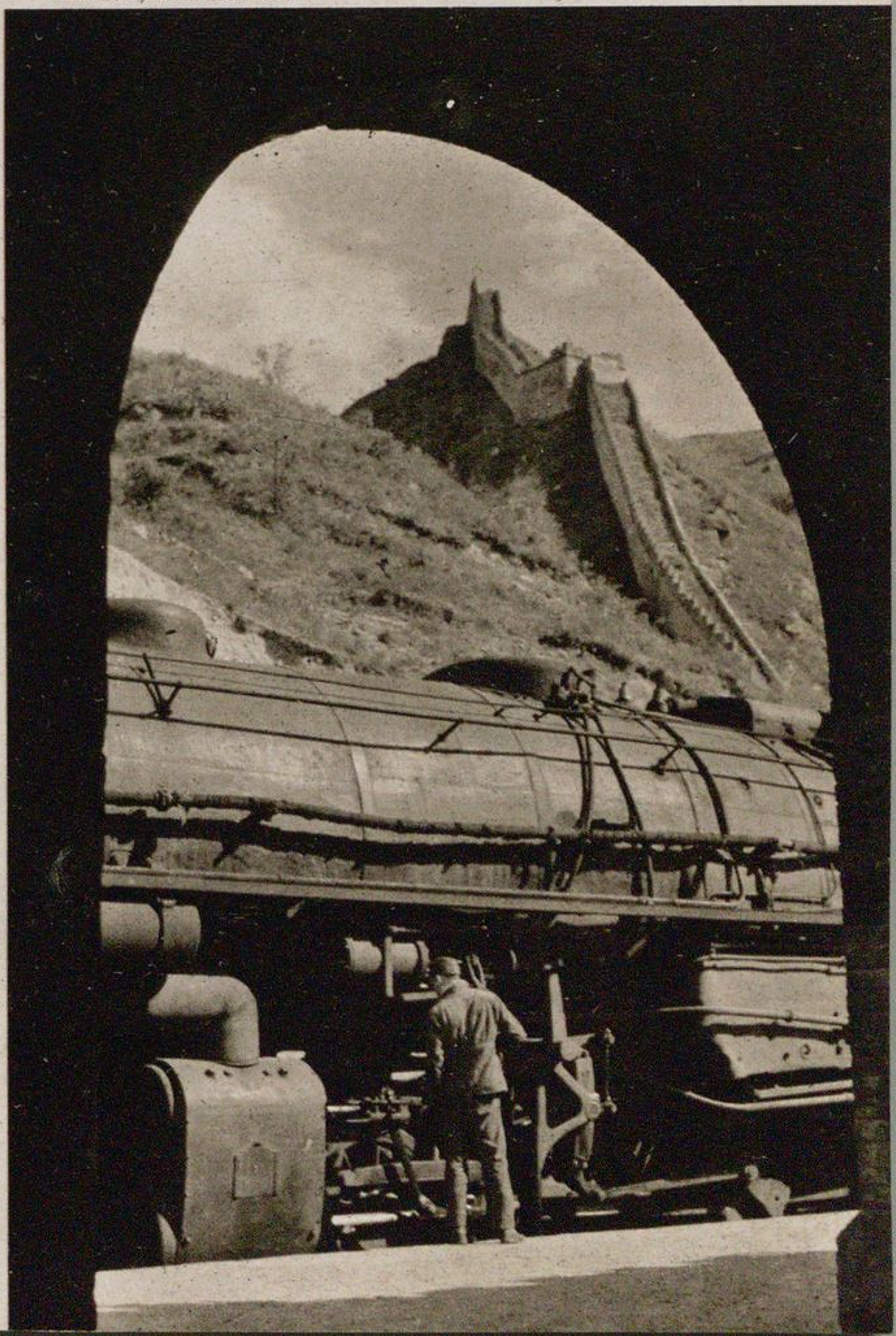
萬里の長城をみるにつけても、吾々は今更のやうに日本人であることのほこりをしみじみと感ぜずに居られないではないか



蒙古から北京あたりへ通ふ隊商は駱駝に乘つて居庸關を通らねばならない

清龍橋の驛から見える長城

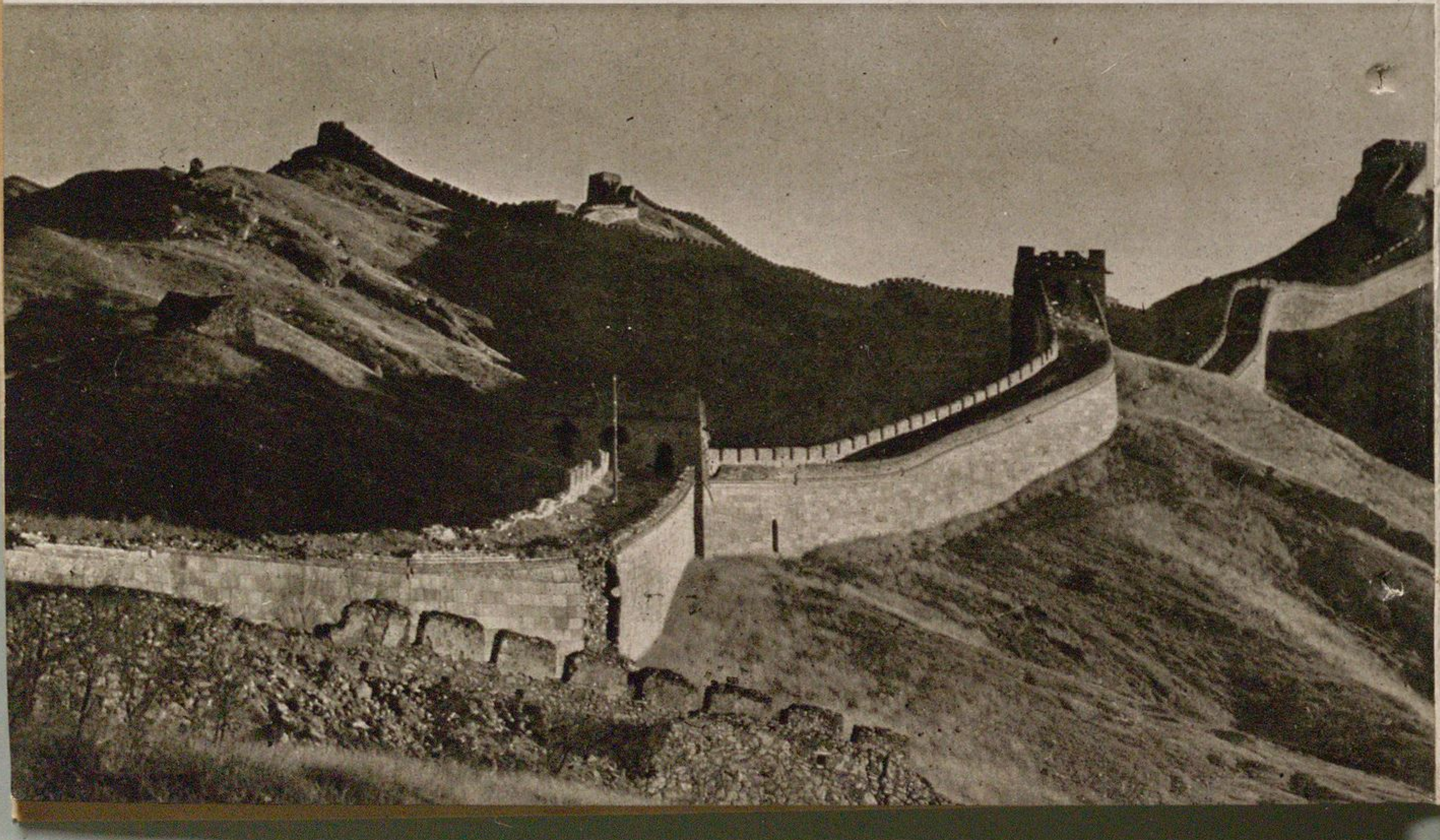






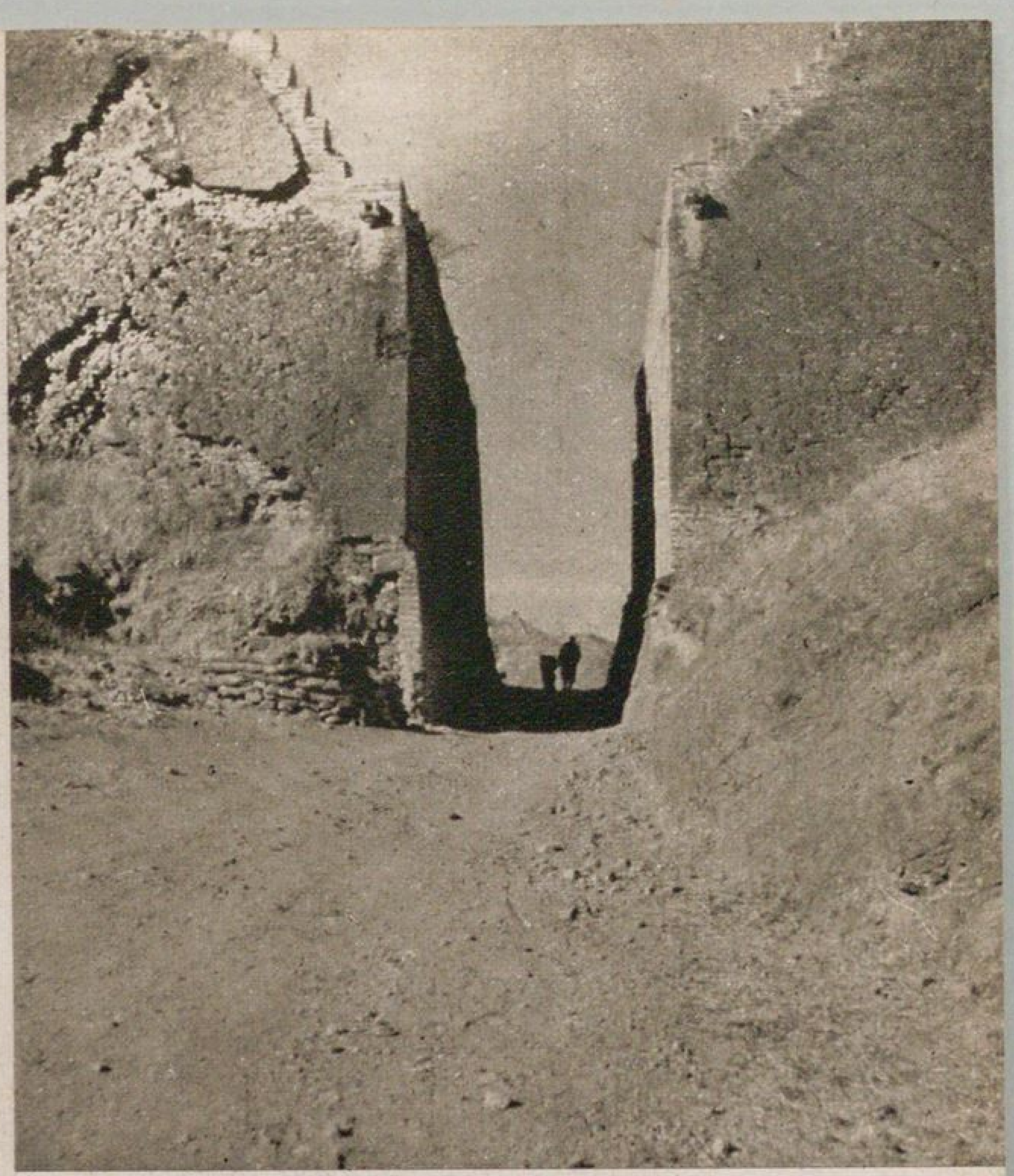
雲臺に刻める廣目天王、たつた一つ元が殘した世界的文化

八達嶺の長城





望樓——風雨に壞れゆく姿

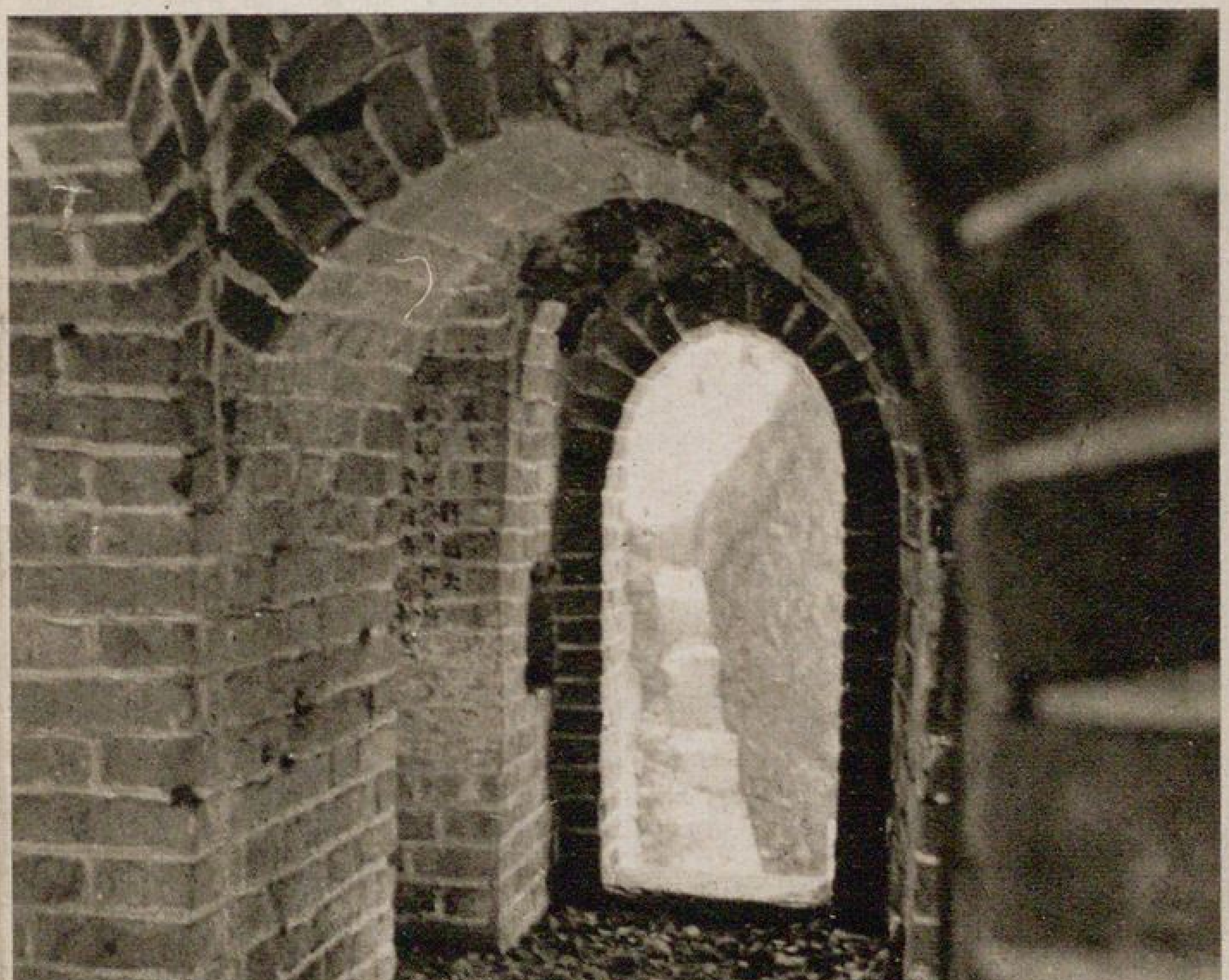


後世つくつた隣村との通路(古北口)

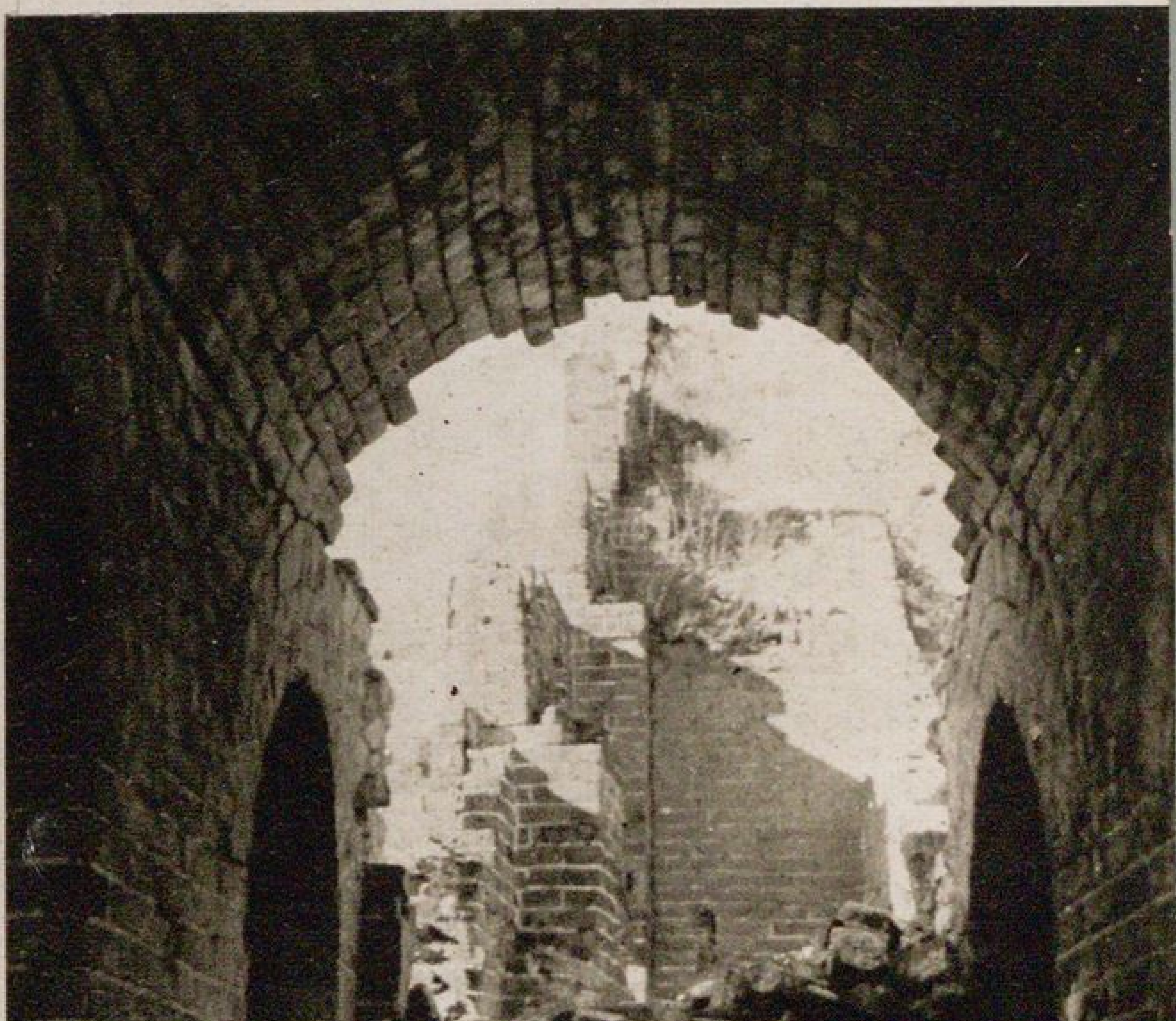
萬里長城・5 構造

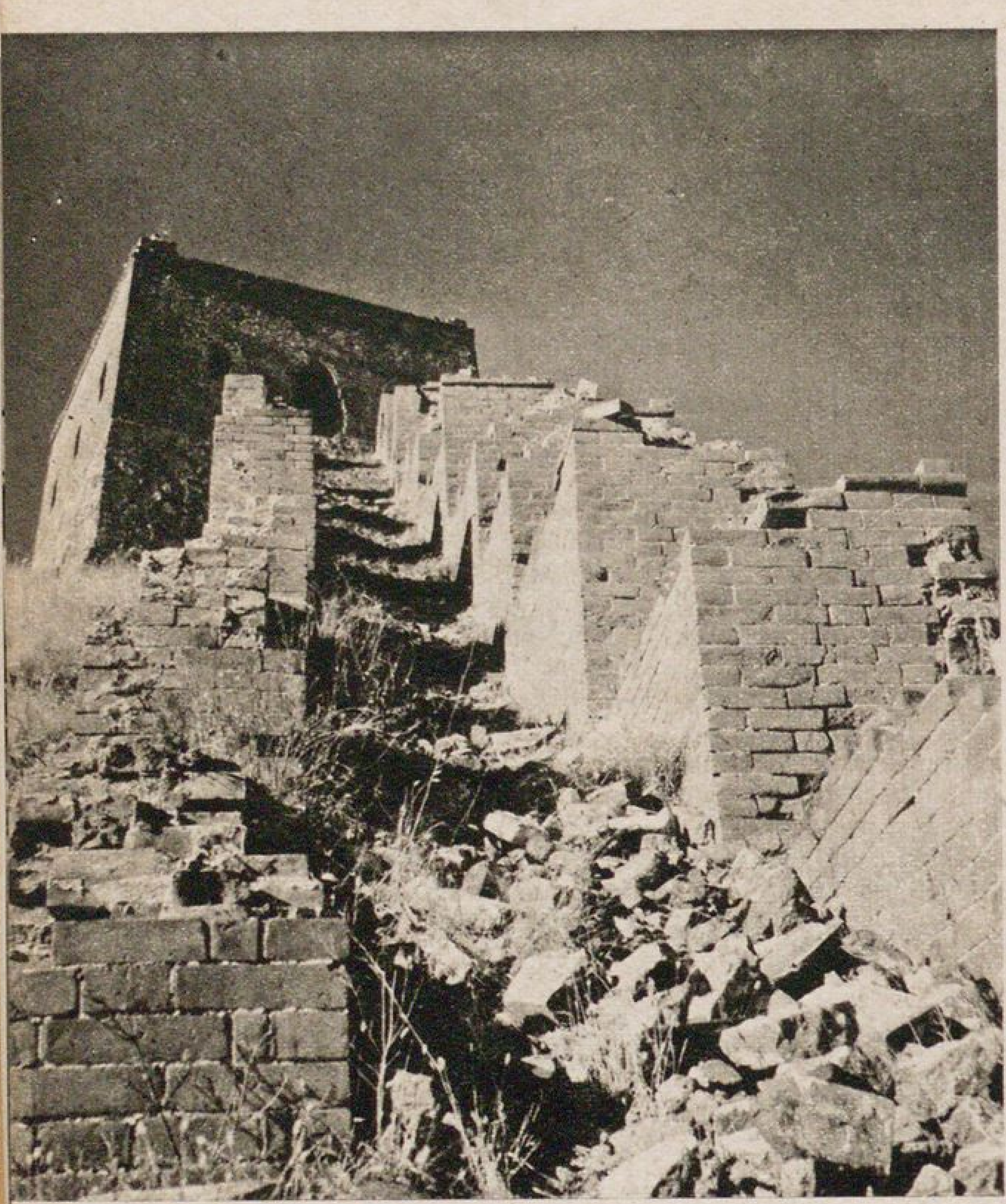
長城はその在り場所によつて高低大小一定でない。八達嶺附近は高さ十五尺から三十尺に及び、壁の上面の廣さは十五尺から二十尺位築材は磚瓦と石の極めて堅牢なものである。壁上にはほゞ一定の距離(三六〇尺と稱す)をおいて「墩臺」と名づくる烽火臺卽ち望樓がある。また處々に通道と稱する暗路を穿ち城壁の上から壁外へ下りる通路をなしてゐるまた、實際防禦にあたつては、この長城の外(つまり北側)に塞徼といふものを連ねそこ

望樓の中、こゝで烽火を焚いた

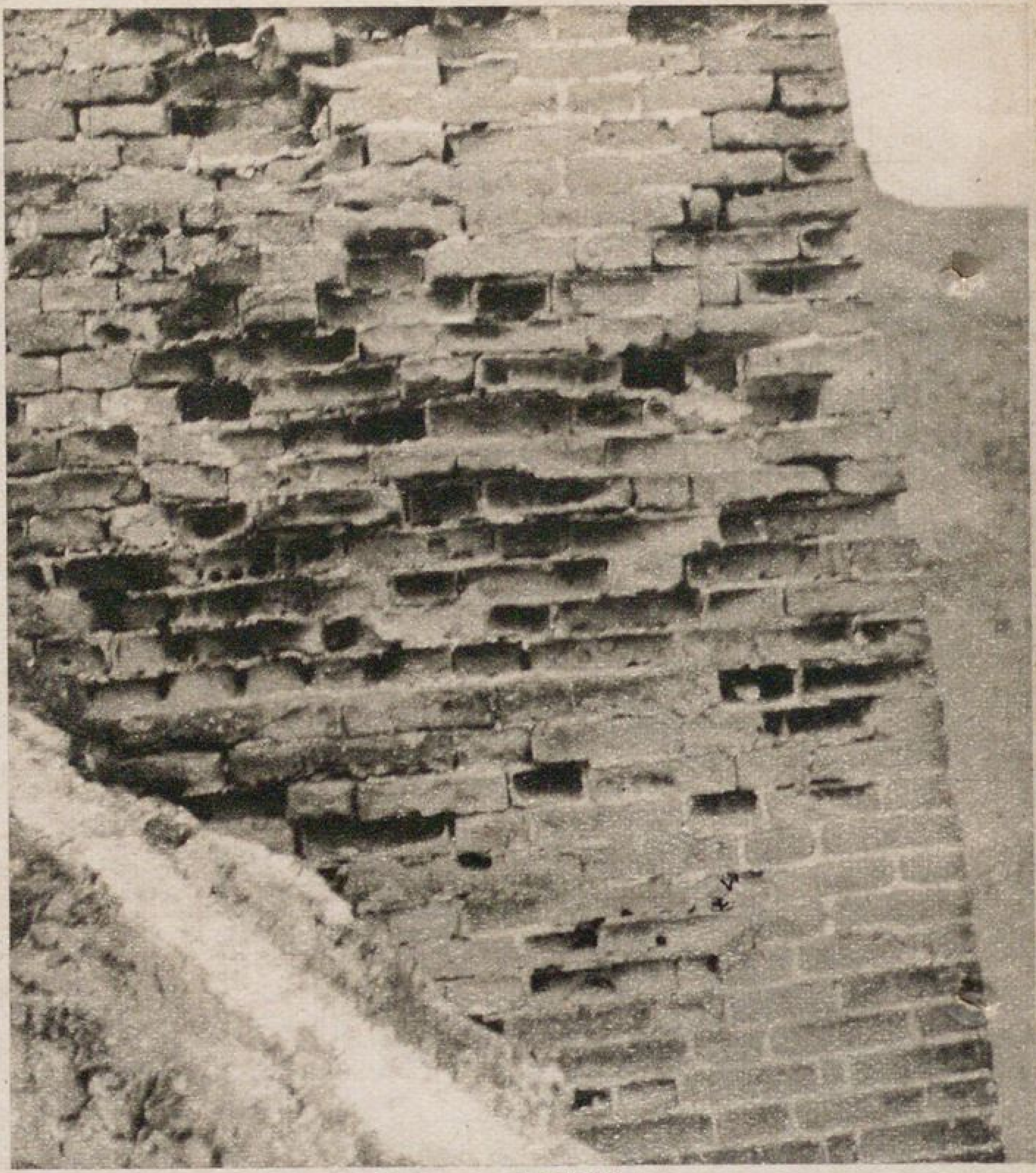


望樓の入口





峻嶮を這ひ上つてゐる部分の一構造

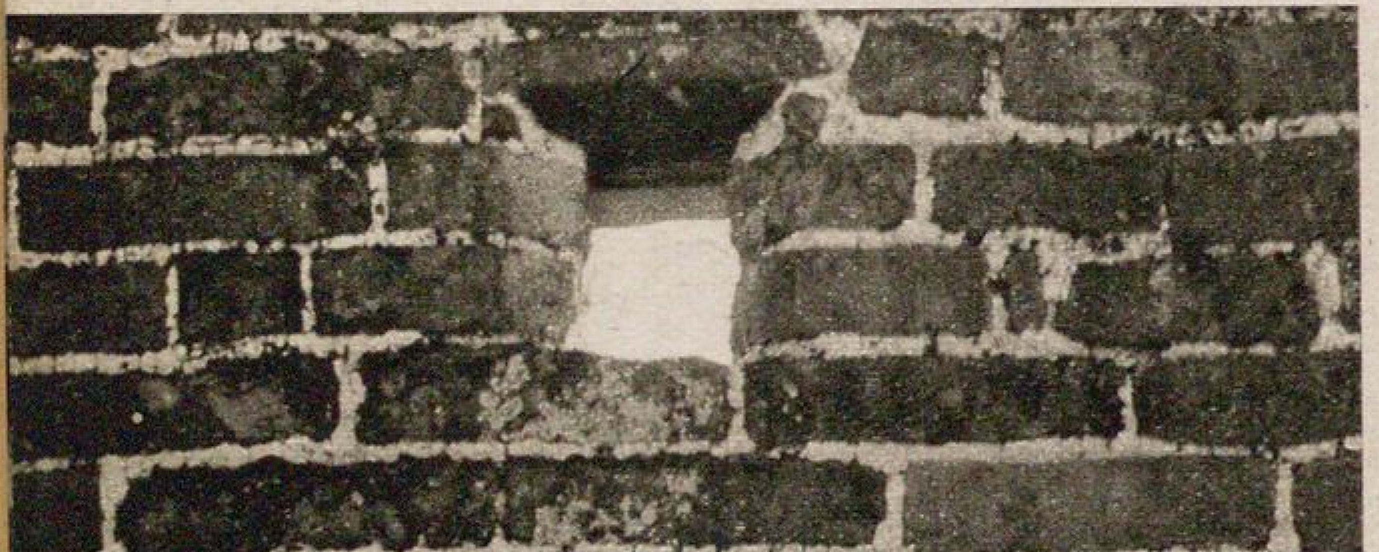


風化の狀態、煉瓦の大きさは場處によつて甚だ相違あり

に塞兵を置いた
即ち長城と塞との關係を略述するなら、長城以外に屯戍があり、屯戍と屯戍の間に亭燧がある。亭燧と屯戍とは幾重にも續きその末に塞徼がある。塞の外にはまた幾つもの屯戍があり、屯戍の間に再び多數の亭燧がある。そしてまた塞がある。そういふものが幾つも重復して屯戍と亭燧で終つてゐるのである。その地方を塞地と云ふ。今の熱河即興安嶺以南及び中南部滿洲地方は當時の塞地であつたのである

けだし、騎馬の英雄である北方の戎狄がこの防壁を乘り越えて南寇することは容易ではなかつたであらう

銃眼、白きは石灰



長城の外面は煉瓦、中味は石



運河

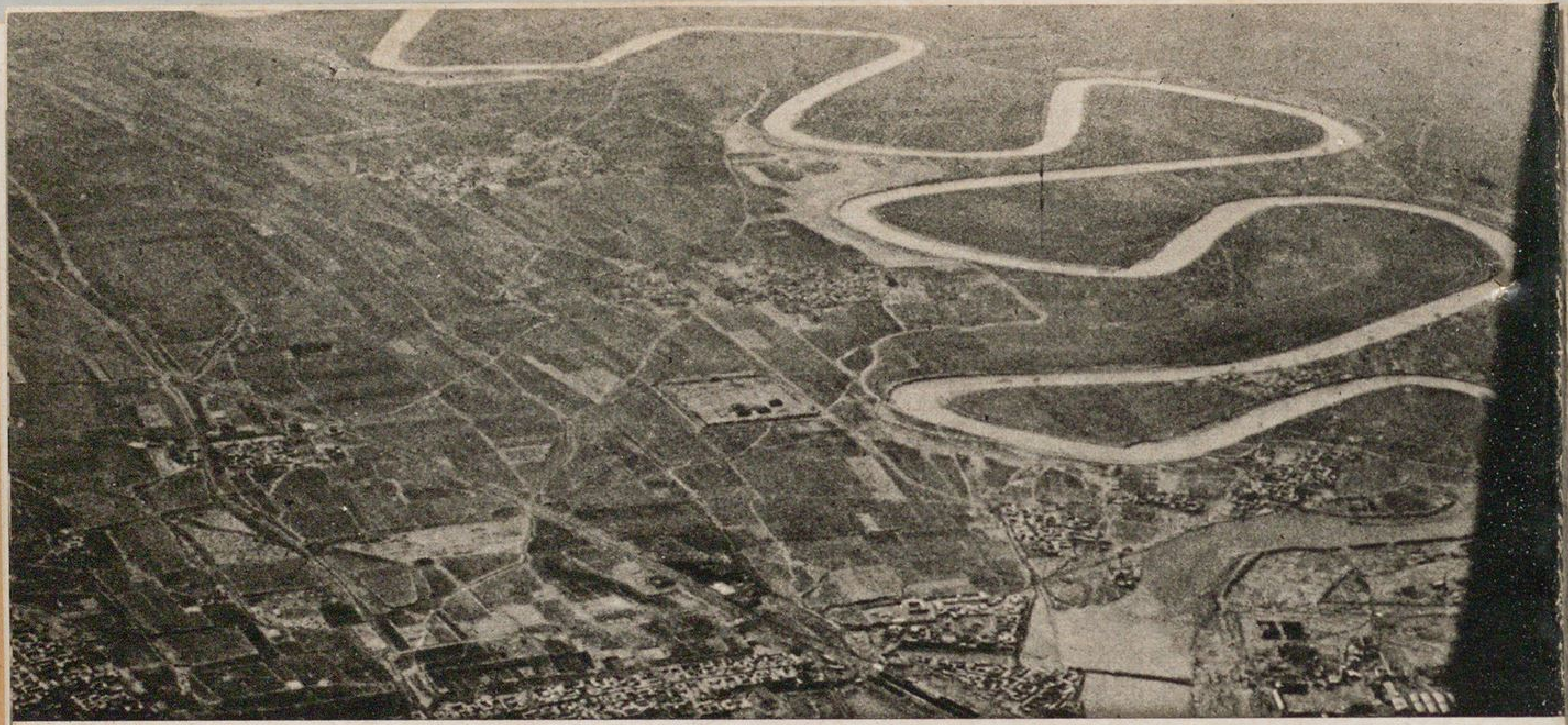
1



荷揚げ



棉花の輸送船團



大運河

民船と船頭

萬里長城と大運河は支那史上は勿論世界史上最大の土木工事である。萬里長城については、前頁に紹介した通りである。運河については、本誌讀物欄に詳記した

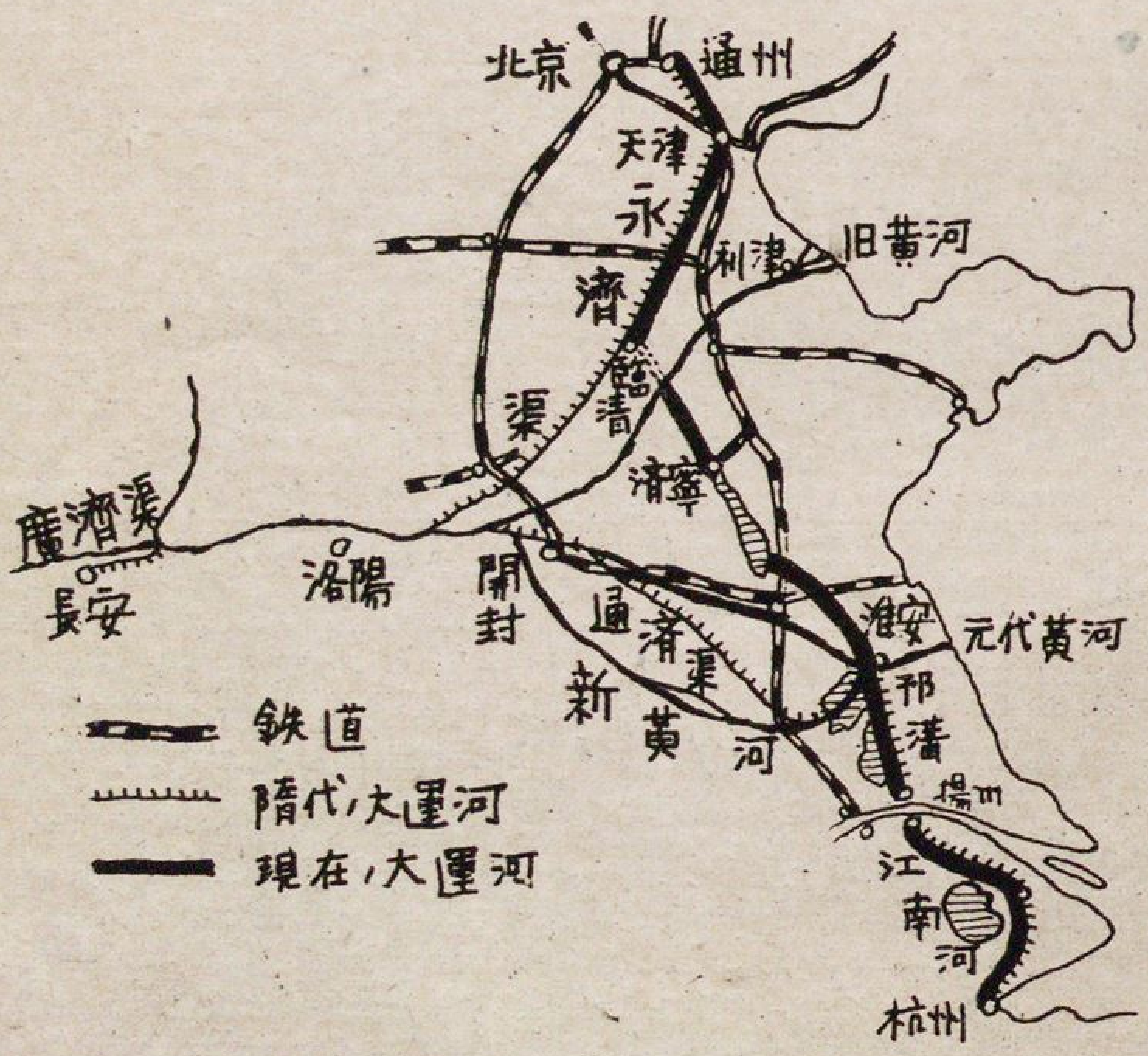
北運河及び南運河の民船は、主として對槽子で（詳細は八月號「内河の船」參照）その型は細長く、二個の箱船を中央で針金や綱でつなぎ、一目見たところ一箇の船舶の外觀をしてゐるが、河狀の如何に依つて分離し適當に操舟し得るものである。その吃水は淺く、北支河川に好適な民船である

濟寧以南の民船は划子（ファーズ）と稱し、昔の運糧船の型をして、分離出來ない帆船である。船上に室をとつてゐるので昔漕運した穀物以外の貨物では甚だ積載効率が上らない。又吃水もやゝ深いので淺い運河には不便である。然し揚子江を横斷して江南へ通ずる等はその得意とするところである

船室は大抵中央と後部にある。前者には水神を祭り主として客間で、昔の運糧船の官吏などが乘船した所である。後者は船頭家族の居間に使用されてゐる。濟寧以南の船頭は生れながらの船頭が大部分で划子は船であると共に彼等の家屋でもある

彼等船頭家族は船の中で產聲を上げそこで生活し、又船の中でその生涯を終るのである

一般に押手（竿で船を押し進む）者、漕手（櫂を漕ぐ者）及び曳手（綱で船を曳く者）は船頭自身がやり、その妻は後部にあつて梶を操つてゐる。四、五十噸級のものになるとそれに相應した數の苦力が傭はれてゐる



新舊運河圖



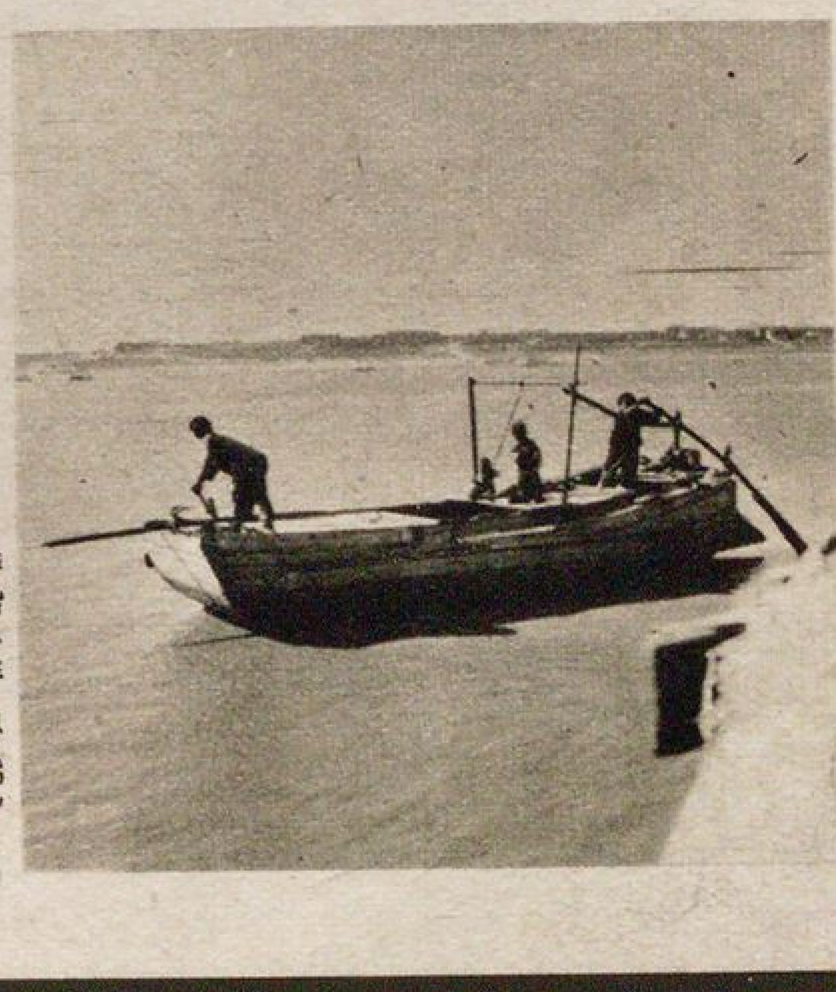
ヴォルガの船唄を思はせるやうな曳船風景

運河 2

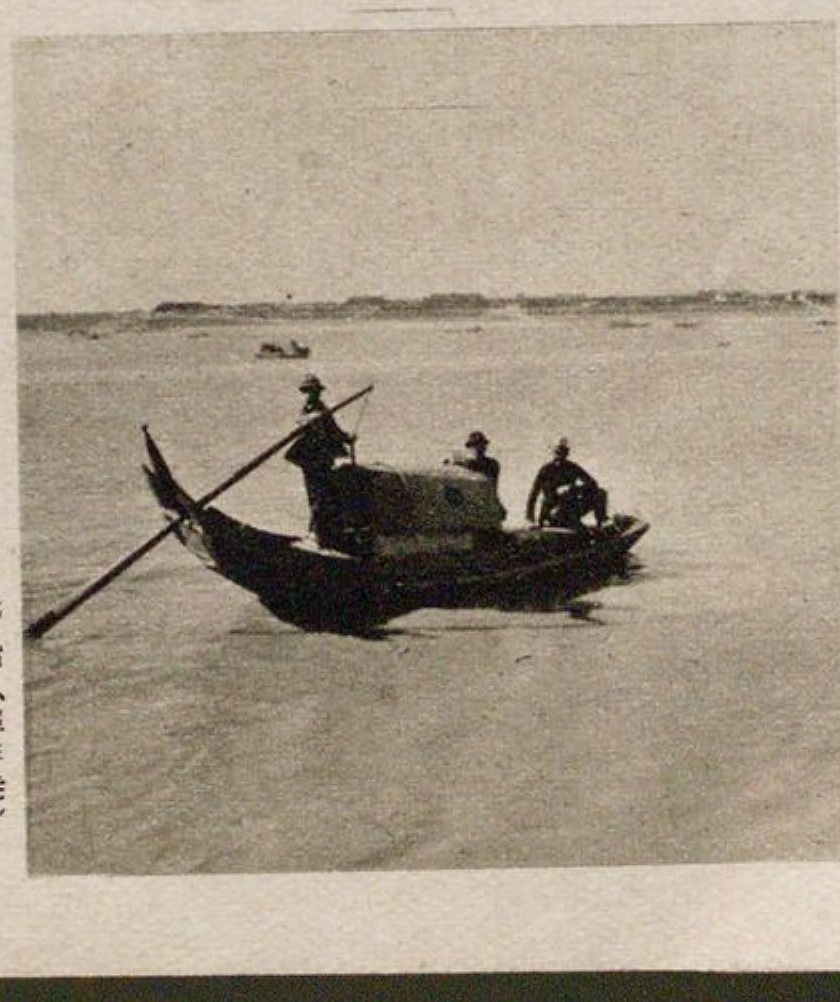
男の子は十三、四才になると一人前の船頭として父に協力し、文字通り一家總動員で稼いでゐる。夫婦仲が悪ければ船は動かないのである。いやでも家族は和氣藹々たるものとなる。遊んでゐる者は溺死を防ぐため背に大瓢簞をつけてゐる小兒位である

前述の如く男子は船頭家族には特に大切なものである

男の子供が只一人しか居ない場合、或は兄弟あつてその兄が死亡した場合、これ等の男子の健在を祈る呪として女裝させる迷信がある。小頭髪（前髪）を下げ、赤いリボンや耳環などつけ、支那芝居の女形のやうに美しく化粧し然も紅の褌子をはいて、名まで女名とする。滿十二才に達し初めて服裝、名共に男子に復するのである。甲板の上で行儀の悪いことをしたり、立ち小便などしてゐる姑娘が居たら、まづこの



民船（蚌埠港）



民船（埠蚌港）

類であると見てよい
女の子は母に手傳ひ梶をとり、帆の揚卸しをしたりする、又船室の水神を祭り香を燒き、鐘をたたいて、三拜九拜し、水路安全家業繁榮を祈るのは女の子の務めである。而て年頃になると紅幕を繞らした花船に乘つて嫁入する。明日よりは紅衣をぬぎ捨てあつばれ新郎船頭の片腕となつて梶取りを務める


縄に結ばれて遊ぶ子供

南運河の或る船着場


運河 3

一家和合して操船するとしても、無風や殊に逆風の場合は相當苦しい。運河の堤を足場として曳船するはよいとしても南陽湖や微山湖等の廣々した湖中で腰まで水につかつて曳船するのは容易なことではない。こんな時には船頭は天を仰いて「ヒョー〳〵」と順風を呼ぶ。筆者もちやうど舟に乘り合せて「先生も風を呼んで呉れ」と云はれ、「ヒョー〳〵」と天に向つて風を呼んだことがある。それに合して、あちらでもこちらでも「ヒョー〳〵」と叫ぶ



巡廻厚生船の餘興に集る沿岸住民



更生船の訪問は沿岸住民の單調を破る。日本の文化はかうしてこんなところへも浸みこんでゆく

すると不思議にも湖面に小波を立てて順風がそよぎ出づるから妙である。「颳起風來了」と喚聲を上げて、帆を揚げる。船は波頭を立てて進むのである。民俗學者の言に依れば、この風習は三千有餘年前よりの慣習であるとのことである。

濟寧附近の民船水上生活者は大抵青幇であり、その生業に依つて夫々載幇、網幇、罾幇、槍幇、其他に分けられる

載幇とは貨物の輸送を主業とするもので北方の船主に比較して、仁義、面子を立てることが強く、又荷主對の權利義務の觀念が特に強い

網幇と罾幇とは漁業を主業として網幇は船體がやゝ大きく、罾幇は小さい。兩者の漁撈の方法も亦變り、網幇はトロール式で、罾幇は流網を中心にし、八方より小舟の圓陣を狹めて魚をその網に追込む方法をとつてゐる

彼等は、生活に困つた時など陸上の穀物を口にしない。鷄頭米といふ湖中の水草の實を主食にしてゐる。これは名の如く鷄の頭のやうな子房の中に茶の果實に似た澱粉質の果實があり、これを石臼で粉にし團子を作つて食ふのである。又菱の實なども重要な食糧となつてゐる

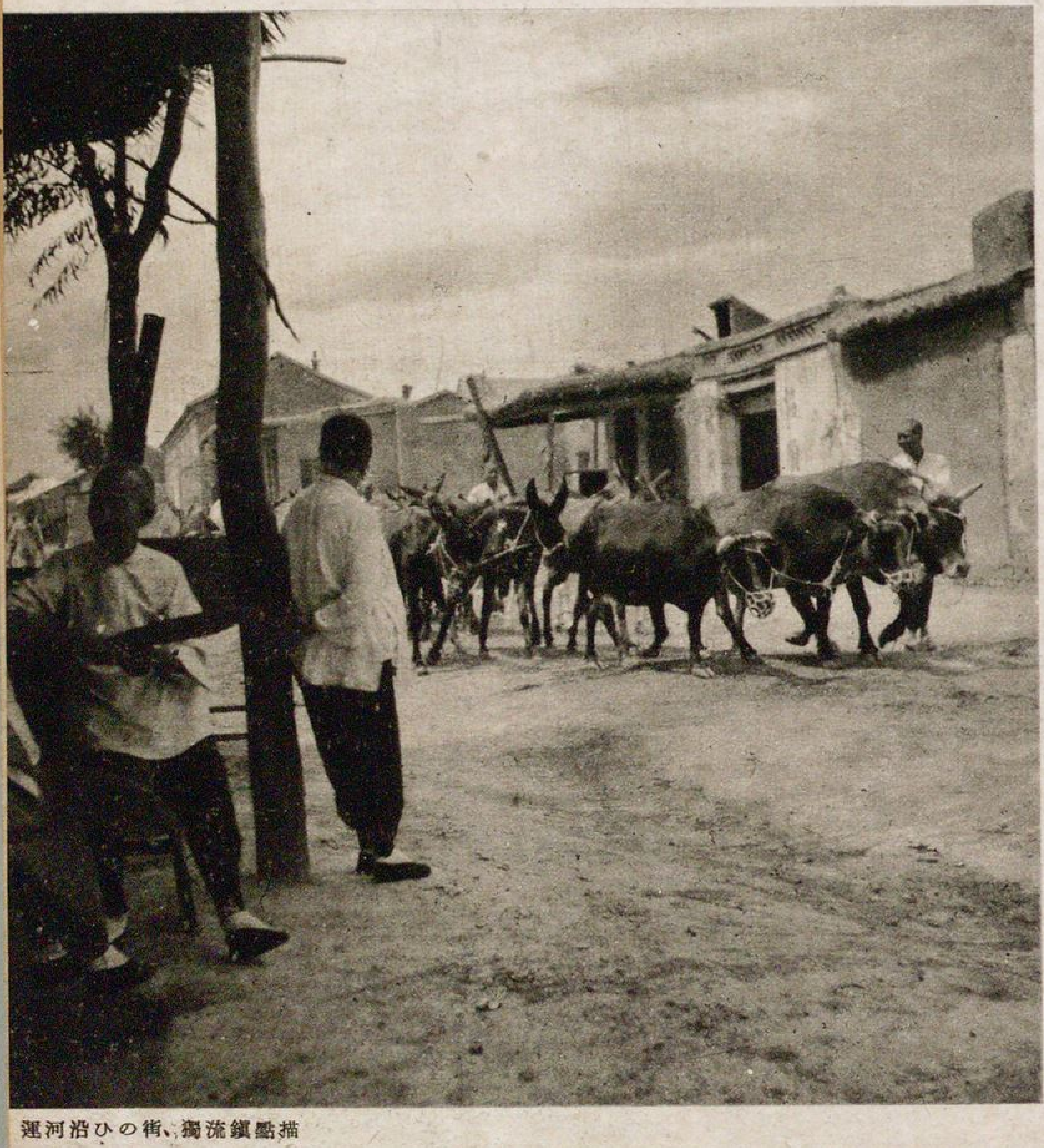
槍幇はその名の如く、小銃、洋砲を持ち、小船を走らせ、湖内の野禽を獲つて生計を立ててゐる。紫禁城にあるやうな三、四米もある筒鐵砲で散彈を發射する。一度に十數羽落ちることは稀ではない

その他は擺渡船（渡し船）や花子船（乞食船）である。乞食でさへ船に乘らねば生きて行けないらしい

貨物を運ぶ載幇は勿論のこと、其の他青幇の運用は今後水運經營上輕視出來ない問題である



徐州附近舊運河の木橋



運河沿ひの街、濁流鎭點描

古都冬日

雪の大柵欄



鐘 樓



北京の正月 1
家庭風景

千數百年の古都北京の地には色々な民族がやつてきて、種々樣々な文化を殘していつた。そのうちでも、今次事變は最も大きな衝撃を與へ、また、文化や習俗の上にも甚大な影響を及ぼすことであらう

さて非常時下に迎へる北京人のお正月生活を少しのぞいてみよう。（正月の行事については本誌讀物欄に詳記す）

寫眞一

除夜には一家擧つて餃子（ジャオズ）をつくる。これは富貴の別なくお正月にたべる中國人のお餅のやうなものである。餡は豚肉と野菜。滿洲の日本人はこれを豚饅頭といつてゐる

寫眞二

祖先を祀る祭段、祖先崇拜は中國の傳統的思想である

寫眞三

元旦の御馳走、すべて緣起のよいものが食卓にあがる





二

三





北京の正月 2
財神廟

財神とは福の神のことである。各戸必ず祀つてあるが、殊に商家では財神の信仰は日本のお稲荷様同様なものである。さてその靈驗がどんなものかは筆者寡聞にして未だ知らず支那では關帝様を本尊とする場合が多い。元來關帝は武神であるが、その超人間的な神力に賴つて財神の役まで引受けてもらふところはほゝゑましい。關帝を祀るところを關帝廟といひ、財神は其他數多く存する

寫眞は何れも財神廟の賑ひ、右は廟へ押し寄せる民衆、左は盛んに香を焚いて一年中の福利を祈念する





北京の正月 3

花燈

正月十三日から十七日まで五日間にわたつて燈節があり、巷々に燈籠がちらほらとして、まことに情緒ゆたかなお祭りである。燈籠は花燈といつて紗絹(うすぎぬ)や硝子及び明膠(さらしにかは)などを以てつくり、極彩色を施して、名人達が意匠をこらしたものである。色々な縁起のよいものを作つて賣り出してゐるが、時節柄飛行機に日の丸のあるものや、鐵兜、戰車、軍艦、大砲などが見られるのはなかなかおもしろい

寫眞右、前門外大柵欄の花燈を賣る舗

寫眞左、花燈を賣る姑娘。王府井に近い胡同にて



北京の正月 4

廟會あちこち

北京では正月の月には一月中お祭りや廟會が續いて、北京の人々は遊ぶのに大へん多忙なことである

西に護國寺、東に隆福寺、宣武門外に土地廟、崇文門外に花兒市、其他大小無數。それぞれに市が立ち、百貨雲集し、書畫骨董から日用雜貨類、文具類玩具、衣服、飲食物から花鳥、蟲魚に至るまで、凡そ無いものはないそれから見世物、芝居、易斷、代書屋（手紙の代筆）まで加つて、世はまことに平和そのものである

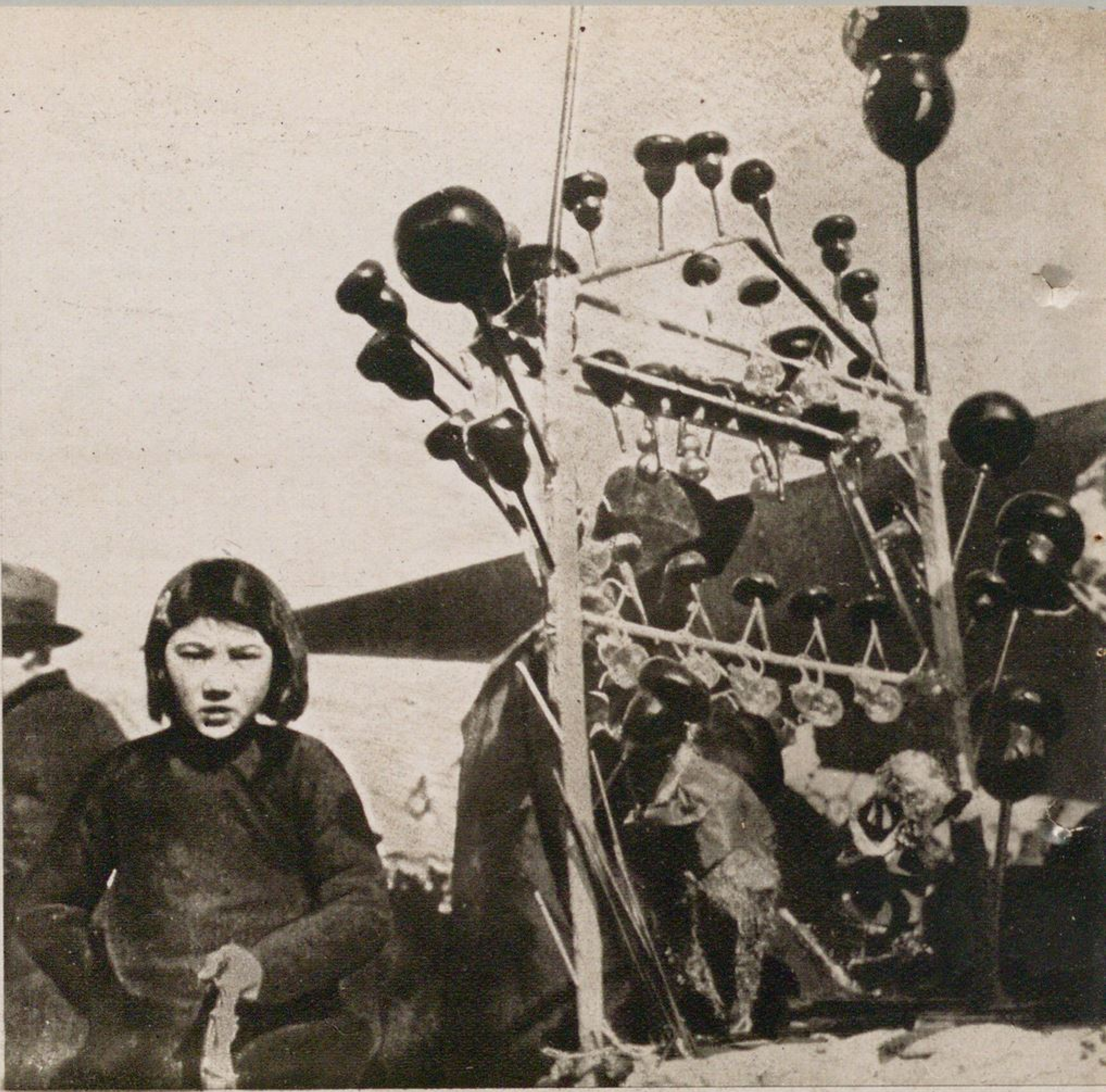
一





寫眞一、廟會から風車兒を購つて歸
る太々と小孩子
二、道路で賣つてゐる凧
三、吹々兒を賣る店、崇文門外
四、花樣を賣る店、蟠桃會

三



四





竈神（四川省）、竈王と竈王奶々、附屬人物は、文官二人、男子、女子、童子、犬猫雄鷄





門神（江西省南昌）のうち將軍類に屬するもの、男童の持つ蓮花は祈福の意味を含む

中國新年の神々

一度でも大陸の土を踏んだ人ならば必ずそこらの民家の門扉に異様な極彩色の繪像を見られたであらう。若し舊正月時分であつたらそれは眞新しくひときは鮮かに目立つ筈。即ち日本ならば門松しめ飾に相應する門神、春聯の類である。さてこれを民俗學的に詮索すれば色々の問題を含んでをり、繪畫的に見たら民藝の一部（民畫）としての大きな領域を占める。ここに掲げる寫眞は昨年七月に開かれた北京東黃城根中法漢學研究所主催の民間新年神像圖畫展覽會出品中より拜借した、誌して謝意を表したい。この展覽會はフランス人杜伯秋（J.P.D.）氏の指導によつて行はれ、全中國より蒐集された門神財神、竈神その他計九十三點、加之參考文獻五十九點の展示あり、珍しく親切に行屆いたものであつた。（因みに華文文獻蒐集に就ては傳惜華先生の指導を仰いだ旨附記されてゐる）中に邦文資料僅かに數點を見た時はちよつと淋しい思をした

此等の神像圖繪（俗に紙馬と云ふ）は殆んど安價な紙に木版を以て刷られ、色彩は赤青黃綠紫等の原色賦彩。流行言葉にしたら神樣の代用品とも云へよう。これを大別して門神と財神に分け次に竈神・百份（一枚刷のものを天地とも云ふ）三代宗親の類に分つ

門神の中には特殊な祈福の意味を含むものとか宗教的要素より裝飾的要素の強いものなどあり、財神には歷史傳說上の人物に託したものが多い

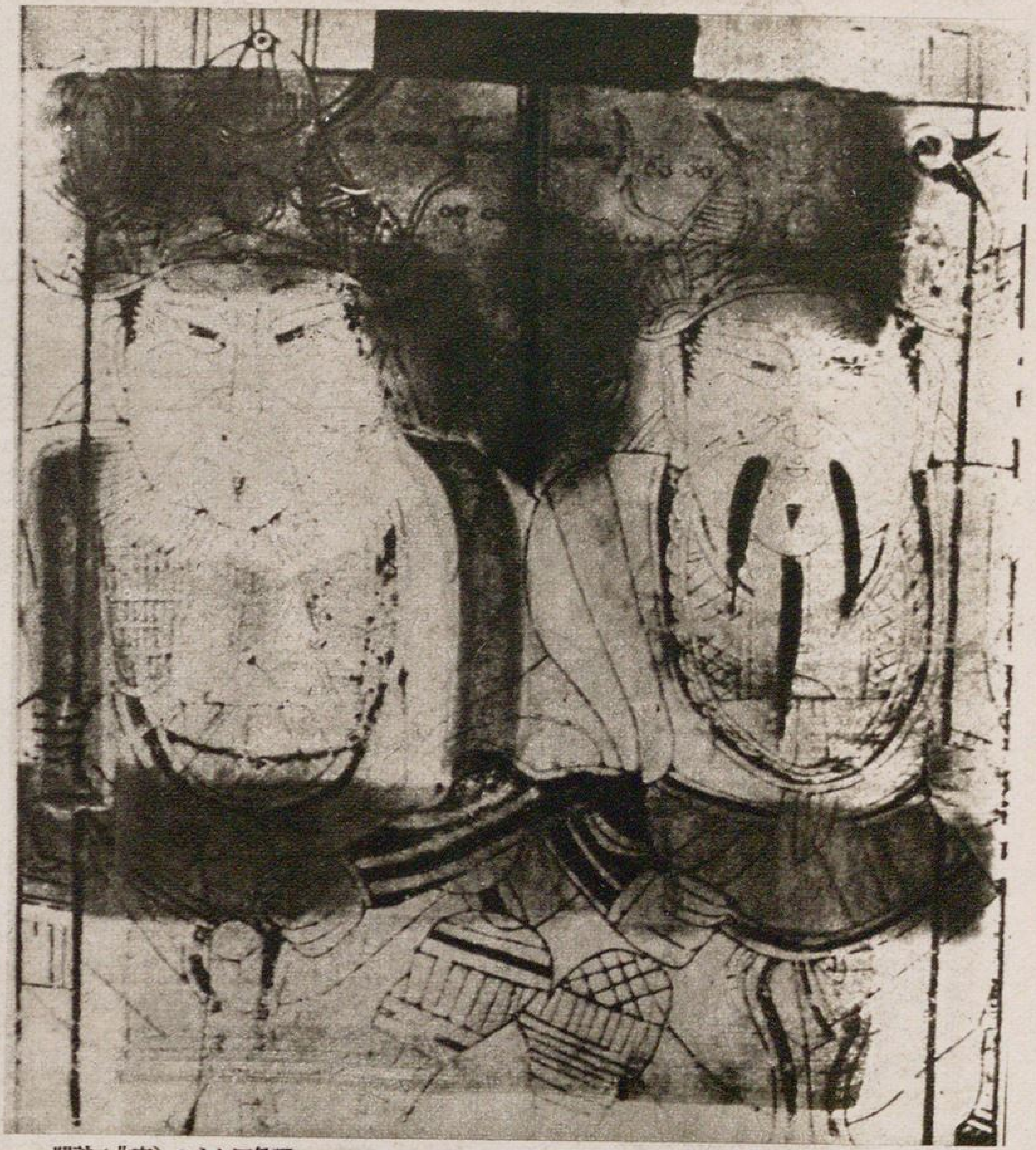
竈神は明かに宗教的祭祀の對象たるものであり、祭祀の起源は隨分古い（禮記祭法に見ゆ）この點寧ろ門神より重要視されるもの

百份或は天地で面白い事は、中國民間信仰に佛道折衷思想を看取出來ることだ。即ち佛教と道教の神樣が仲良く並んでゐる

最後の三代宗親は宗族主義に於ける祖先崇拜思想の表現をみるところに注意されたい。（責・中島）

表紙の門神（河南省鄭州）は勇士類に屬するもの。馬超と馬岱會戰の圖





門神（北京）のうち百份類
に屬するもので焚化用の繪
像。人物は秦瓊と尉遲恭





門神（江西省九江）のう
ち白加官に屬する文門神

中國新年の神々 2



門神（河南省鄭州）のうち麒麟類に屬するもの。送子娘々を向ひ合せに描く



門神（河南省鄭州）のうち三星類に屬するもの、福祿壽三星のうち壽星老人を中心に福は背景の文字、祿は鹿を以て表はす

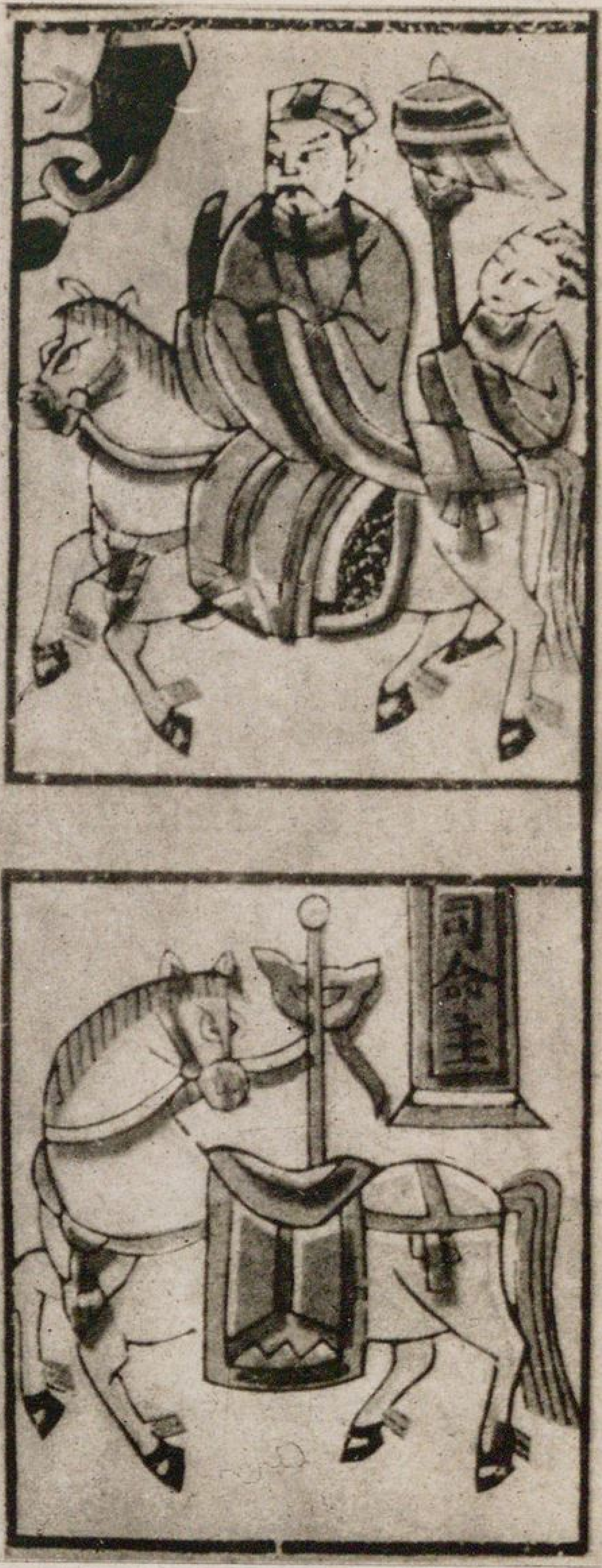


財神（四川省）增福財神と護衛二人。日本ならば大黒様に當る



門神（河南省鄭州）のうち財神の意味を含むもの。招財童子を一對に描く

中國新年の神々 3



竈神（陝西省）・紙馬のうちでも特異な小幅のもの、上下に分けて下は旣に竈王昇天の後を表す



竈神（四川省）・前掲四川のものと大差はないが、これには馬夫と乗馬がある



百份（北京）・人物は爐火の神、上左右は男僕、女侍、下は仕事中の鍛冶屋



全神（山東省濰縣）人物三十八神
釋迦、四聖、觀音、娘々その他文
字通り天地もろもろの神々を描く



天地（河北省大名）・玉皇上帝と
掌扇を持つ者二人、天將四人



三代宗親（陝西省）・主神は
家中の父母、下は天官、年
少男女各一、童子二人



永明寺寶塔——北京・西直門外



宣武城街より青河橋を見る——張家口

正月の行事（北京）

遼金以來、元明清を通じ現代に至るまで連綿たる歷史生活を續けてきた古都北京には、自らその間に形成された生活樣式をもつてゐる。契丹、女眞、蒙古、滿洲などの北方民族と中原の漢民族とは交々此處を都とした、その際おのおのの民族は樣々な影響をもたらしたのである。複雜多岐な要素を有する北京の文化はそんな風に形成されて來たのであるが、今次の事變は色々な方面に於てまた此地にさまざまな影響を與へるであらう。

北京の正月は一年中でも一番お祭りの多い月である。

元旦

元旦のことを大年初一（タアネンチウイ）と謂ふ、初一に到る每に、子刻以後には香を焚いて接神（ヂエシエン）をし、（接神とは神々を御迎へすることであり、陰曆十二月二十三日竈の神が天帝に一家の善惡功罪を報告する爲に旅立ち、それから一週間の評定を終り大晦日夜半に下界に降る、其際天上天下八百萬の神々が共に降臨されるのでこれを御迎へする儀式である。各戶では竈神婦や萬神の御像紙を祀りこれに供物をする。其の刻限に至ると男子は禮裝して祭壇に向つて禮拜をする。それが濟むと萬神の御像紙の方は燒却される）さうして夜もすがら爆竹を燃して恭敬の意をつくすのである。

むかしは、接神がすむと王公から百官に至るまで、均しく朝廷に至り天子に拜賀せねばならなかつた。拜賀が畢ると親戚友人に挨拶廻りをした。これを道新喜（タオシンシ）と謂ふ。

此日は貧富貴賤の別なく、皆餃子（ジヤオズ）を食べるのである。これを煮餑餑（ヂウボウボウ）と謂ふ（餃子とは外皮を饂飩粉でつくり、中に豚肉や韮菜等の青味を入れた饅頭のことである）

この習慣は全國同じであつて、富貴の家では小粒の金銀や寶石などをその中に入れておいて、それによつて順運吉利のことをトふのである。この饅頭の形が元寶形即ち馬蹄銀に似て居るところから緣起のよい食となつてゐるのである。

二日　財神の祭

財神とは福の神のことである。各家每に祀つてゐるが殊に商家では信仰し武財神と稱して關帝を本尊にする場合が多い。（關帝に就ては本誌十月號で紹介した）また別に財神廟と稱せられるものがある。北京では廣安門外を西に去る約五支里、五顯財神廟が名高い。

此廟は俗に五哥廟と云ひ、廟宇はさほど大きくはないが、戲臺のあるのも此邊では珍らしく、本殿には武裝をした五尊の神像を配し、後殿には觀音や關帝を祀つてある。俗傳によると、曾て五人の豪俠があり、生前には弱きを扶け強きを抑へた。歿後明の英宗復辟の頃には靈異を顯して國を護り民を裕かにした。それで天順二年（西紀一四五八）に五顯元帥に封ぜられ、廟を建てて祭祀するに至つたといふ。何處まで信用出來る話やら、頗る疑はしい。

また一說には此神は南方の五通神と同一であるといふ。五通神は一つに五聖、五顯靈公、五郎神などと呼ばれ、明代江蘇地方で盛に奉祀された淫邪神であるが、遠く唐宋時代にも存して居り、其起源は、神仙は五つの通力を有

内容

第五卷第一號

し不死であるとの俗説と關係があるらしい。乾燥しきつた畑中に建つてゐるこの五顯財廟神は、この日甚だにぎはふ。城内の參詣者は暗い内から廣安門に詰めかけ、開門を待ち、徒歩、洋車馬車、驢馬、馬車などで我さきにと急ぐ。參詣を終ると、紙製の元寶（馬蹄銀）を神前から拜借して歸る。この日廟前や路傍には飲食店玩具店が並び、特に花簪の店が目立つ、參詣歸りには大がいこれを購ふ。

五日　破五

この日を破五といふ。破五以内においては米で炊事をするを得ないし、婦女子は外出するを得ぬ、六日になると王妃内親王より各女官等に及ぶまで盛裝して往來し、互に年賀の挨拶をしたものである。

新嫁も亦此日に里歸りをする。春は和み、春泥は解けて滑かとなり、香木を用ひた華美な車や五彩の幔を垂れた乘物が巷や往來に塡塞がる。市肆の商人も亦、漸次、戸張を開いて商賣する。

七日　人日

この日若し天氣が清朗であれば、一年を通じて人の出産が盛んであるといふ。東方朔（前漢、武帝時代の人）の「占書」をみるに、歳の始の八日間は一日が鷄の日、二日が犬、三日が豚、四日が羊、五日が牛、六日が馬、七日が人、八日は穀物の日である。其日天氣が清朗ならば此の日に該當して生ずるところの物は育成し、若し陰れば災があると記されてゐる。これが農業國に最も必要なものを日に配し、天氣で占ふのが面白い。

八日　星祭

八日の黄昏の後、紙に油を浸し、燈明一百零八盞をともし、香を焚いて星を祀る。これを順星といふ。十三日から十六日に至る間、家の奥から正門に至るまで燈明をともして四邊を照す。これを散燈火と謂ひ、又は散小人とも謂ふ。このことも亦不祥を避除する意味である。

十三日から十七日に至るまで　燈節

この五日間を燈節といふが、たゞ十五日だけは正燈といふ。毎年燈節には宮廷では饗宴を行ひ、花火を放ち、市肆では燈籠を吊す。目抜きの大通りでは今ぢや大柵欄が最も盛である。むかしは東四牌樓、地安門が最も盛で、工部、兵部（現各國使館區域の東北隅にあつた）これに次いださうである。

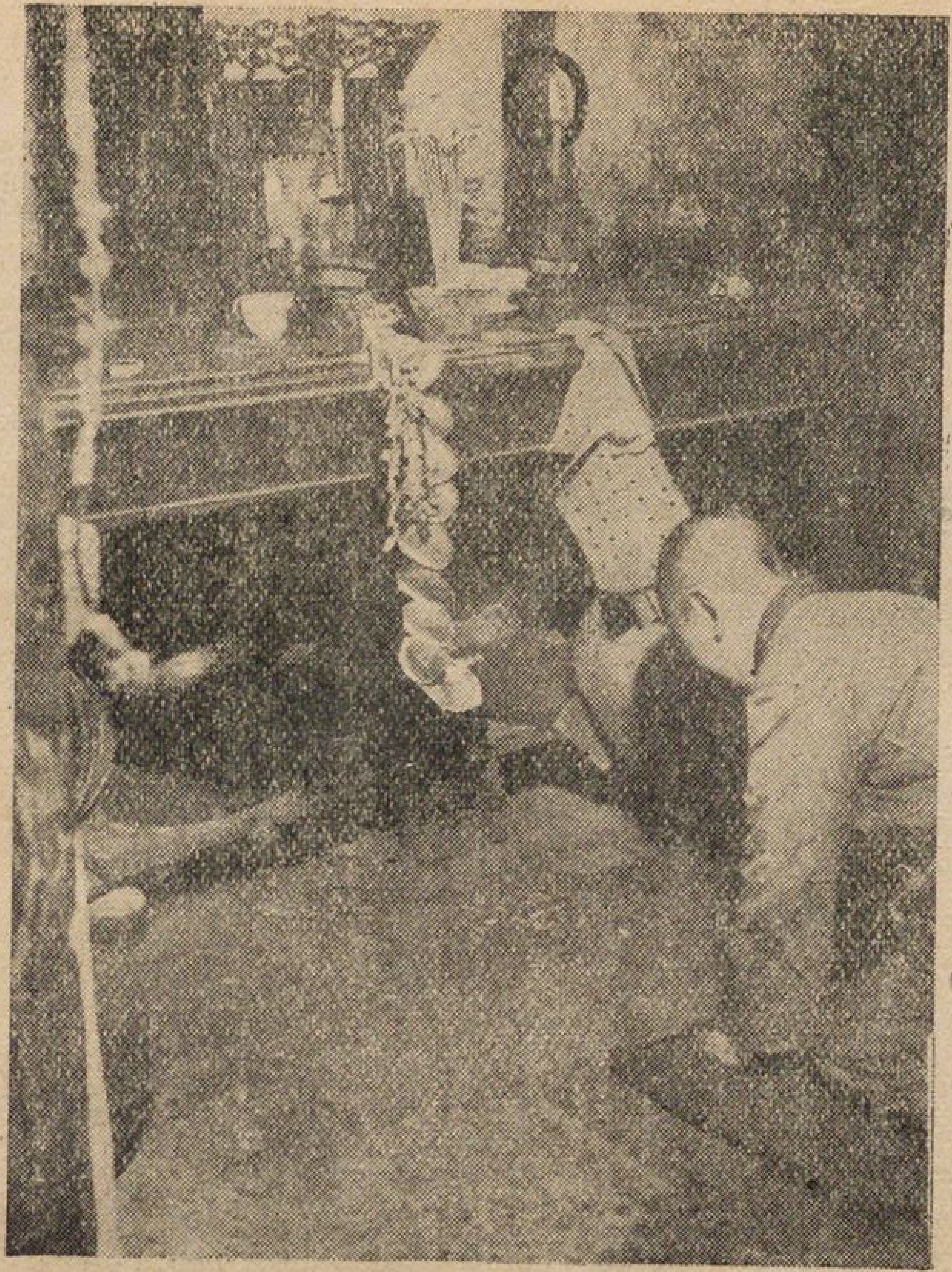
各種の燈籠は多くは紗絹、硝子、及び明膠などを以て作りその面には古今の故事を書いて玩具に供してゐる。市民の器用な者は又結氷させて器を作り麥苗を栽植して人や物の形を作る。華にして侈ならず、樸にして俗ならず、殊に觀るに値するものである。

花火を賣る小屋掛けの店では、各種の花火を製造し、巧を競ひ奇を爭ふ。花火の種類には、盒子、花盆、烟火杆子、線穿牡丹、水澆蓮、金盤落月葡萄架、旂火、二踢脚、飛天十響、五鬼鬧判兒、八角子、炮打襄陽城、匣炮、天地燈等の種類がある。これを富室豪門の人々は爭つて相購買するのである。

市場で賣り出す食物には、乾物も鮮貨も倶に備つて居るが、太宗たるは元宵（糯の粉で外を裹み、中に餡を入れた團子である、餡は棗、山楂子、胡桃其他の乾果と砂糖とを練つてつくり、茹でて食べる）である。これは時節の情景を點綴する所以のものだ。又金魚を賣るものがある。硝子瓶に金魚を入れ其影を移動させると、俄に形が大小に變る、全く他所には無い所のものである。

十九日　筵九

この日には天子は中海の紫光閣に行幸したまうて、饗宴を張り、遊藝や相撲を御覽ぜられた。朝覲のために北京



竈神へ禮拜

に來てゐた蒙古の王公は此日故國に歸還せんことを願ひ出づるのである。又臣下の中で貂裘を着用することを得る者は盡く此日脫ぎ去り、改めて白鋒毛（白狐の皮）を裏につけた上衣を着用する。

民間では別に記すべきことはないが白雲觀に遊覽する者がある。これを會神仙と謂つてゐる。

御用始め

開印（卽ち御用始め）の期日大約十九、二十、二十一日の間である。欽天監（天文曆數等を管掌する役所）がこの三日の內で吉日吉時を選擇し、前以て通知する。官吏は其日禮服を着用し儀式を行ふ。開印の後は通常の如く事務を執る。

打鬼

打鬼は西域の佛法に基いたものではあるが、決して怪異な風習ではない。卽ち古代の九門（「禮記」の月令篇に、季春之月……命二國〔人〕一難。九門磔攘。以畢二春氣一……仲秋之月……天子乃難。以達二秋氣一……季冬之月……命二有司一大難。旁磔二〔於四方之門〕一。以送二寒氣一と見える條を指したものである。北京の內城の門も九つだ）に於て追儺を行ふ遺風と同じ性質のものであつて、また、不祥を拂ひ除く手段である。つねに打鬼の日に至ると各々の喇嘛僧は諸々の神に扮して邪魔を驅逐する。見物衆甚だ多く、萬家の人々巷を空にしてこれに赴くの風がある。

むかしは朝廷では佛法を重んじ、特に散秩大臣を一人派遣してこれに臨場せしめた。

打鬼の期日は黃寺は十五日、黑寺は二十三日、雍和宮では三十日であるが今では雍和宮だけしか行はれない。

雍和宮では三日間に亙り、廿九日が演鬼、卅日が打鬼、一日が繞寺と稱する。勿論打鬼當日が行事の中心で、此日が最も雜踏する。それは全く驚べき人出である。佛殿に於て喇嘛僧の讀經燒香が濟んだ後、盛裝の彼等が庭前に現れる。突如として牛や鹿の假面をかぶつた怪物が群集中に飛込んで來る。これが鬼だ。皮製の鞭に追はれ乍ら走り廻り、時々奇怪な恰好で跳舞する。喇嘛獨得な鉦鼓の樂が奏でられると別に假面の一組が現はれる。菩薩を裝ふ者、天王に化する者、或は動物の姿の神將もある。これもをどる。然し單純なをどりである。廣場を一巡するとそれで儀式が終る。

塡倉

每年一月二十五日になると、米穀商は倉神の祭祀を行ふ。花火が甚だ盛んである。民衆が盡く祭祀を行ふわけではないが、然し必らず飲食物を調理して、召使達を勞ふ。

「北京歲時記」に、『人家では豚、牛、羊の肉を買ひ、終日御馳走を存分にする。若し客が來訪すれば、ねんごろに、留め、必ず飽食して去らせる。これを塡倉といふ。』とある。

大鐘寺

大鐘寺は本名を覺生寺と云ひ、大鐘によつてこの名を得たのである。思ふに年中降雨を祈るところである。正月になると、元日から始つて十日間緣日がある。その間遊ぶ人が群集し、男女雲の如しだ。

この鐘は明の嘉靖年間（一五二二—六六）には萬壽寺に懸つてゐたが、後に言をなすものがあつて謂ふに、京師の白虎の方（五行說でいふ西方）に金聲があつてはならぬと。そこで鐘樓を取り拂つて、鐘を地に臥せて置いた。そして淸朝乾隆八年に至り覺生寺に移したのである。雍正十一年（一七三三）の創建になり德勝門外七支里、元の土城の西北、曾家莊に在る。鐘の高さ五丈。純銅製、形端正、地肌細かにして誠に至寶である。だが未だこの鐘の音を聽いた者は今日の北京人には居ないといふ。

白雲觀

　白雲觀は阜成門外の西南五六里にあり、其開基は最も古く、金、元以來から存在してゐる。觀內にある萬古長春の四字は尚、長春眞人邱處機（金末元初の人成吉思汗に信任され、晩年白雲觀に住して、同教の弘通に寄與すること最も大きかつた。彼がサマルカンドに至り更にアフガニスタンに達して太祖の軍營に謁見した事情は「長春眞人西遊記」と云ふ當時の紀行に詳しく傳へられてゐる）の書いたところのものとされてゐる。毎年正月になると緣日が元日からはじまつて十九日間ある。此間遊人は絡繹として續き、車馬は奔騰して行く。十九日に至ると最も盛んである。これを會神仙といふ。相傳ふらく、十八日の夜中必ず神仙が下界に降り或は遊人に幻り或は乞丐に化す。若し緣あつてこれに遇ふ者は病氣を却け年齢を延ばすことが出來ると。だから道士等は三三五五群をなして廊下に趺坐し、一度遇見せんと冀つてゐる。

　觀內に老人堂がある。此處には皆道士の年老いた者が居る。神仙ではないけれども年齢百歳を過ぎた者も恆にある。これ亦修養に因つて長壽し得るといふ明らかな證據だ。

　「日下舊聞考」によると白雲觀は元の太極宮の遺址である。觀內には邱眞人の像を塑してある。其相好を見るに白皙にして鬚眉が無い。正月十九日には北京の人々が此處に來て、地に酒を灑ぎ祭を行ふ。これを燕九節といふ。長春眞人は山東登州棲霞縣の人で、名は機處、號は長春子といふ。年十九歳にして出家し、全眞教の道士となり、登州寧海縣の崑崙山で學んだ。己卯の歳（一二一九）に、元の太祖成吉思汗が奈曼（アルタイ山脈からイルテッシ河畔に至る地方に遊牧したトルコ族で、一二〇四年成吉思汗に征服さる）から使を遣して彼を召した。使者の未だ至らぬ時、眞人はその弟子に語つて曰ふに速に旅裝を整へよ、天子の使者が來り、我を召すが故に行かなければならないのだと。翌日使者が來たので、そこで弟子十八人と一緒に發つた。數十ケ國を經、萬餘里を行き漸く雪山（卽ちヒンドゥクシ山脈）に達した。さうして眞人が毎に太祖に向つて言ふに、天下を統一せんと欲する者は必ず殺人を嗜んではならぬと。

　太祖が爲政の方法を問ふに及んでは、敬天愛民が根本だと告げ、長壽の道に就いて問はれると、清心寡慾を要諦とすると答へた。太祖は大いに悦び、左史（天子の起居・言行を記錄する役人）に命じ彼の諸對策を書かしめた。後に眞人が東方に歸還せんことを乞うたので、太祖は遂に神仙と曰ふ號を賜り、大宗師といふ位に封じて、天下の道教を管掌させ、更に燕京の太極宮に居らしめた。これは後に名を改めて長春宮とした。卽ち今の白雲觀である。眞人は八十にして歿した。其時彼の屍は分解して、仙化し去つたといふ。と記されてゐる。

廠甸兒

　これは今の琉璃廠のことである。昔は海王村と曰つた。前門外二支里ばかりの所。店舗林立し、骨董、書畫、筆墨書籍を售る、乃ち文人の鑒賞する所のものである。

　正月になると元日からはじまつて、市を開くこと半ケ月、此地はもと官設の釉瓦製造場であつた。明清時代に現在の海王公園に窯があつたのである。

其他の廟

　西に護國寺、東に隆福寺、宣武門外に土地廟、崇文門外に花兒市があり、それぞれ正月には市が立ち、百貨雲集し凡そ珠玉、綾羅、衣服、飲食物、骨董、書畫、花鳥、蟲魚より日用品、易斷、見世物、芝居など殆んど無いものはなく、老若男女集つて賑やかなことである。

大運河の話

沿革

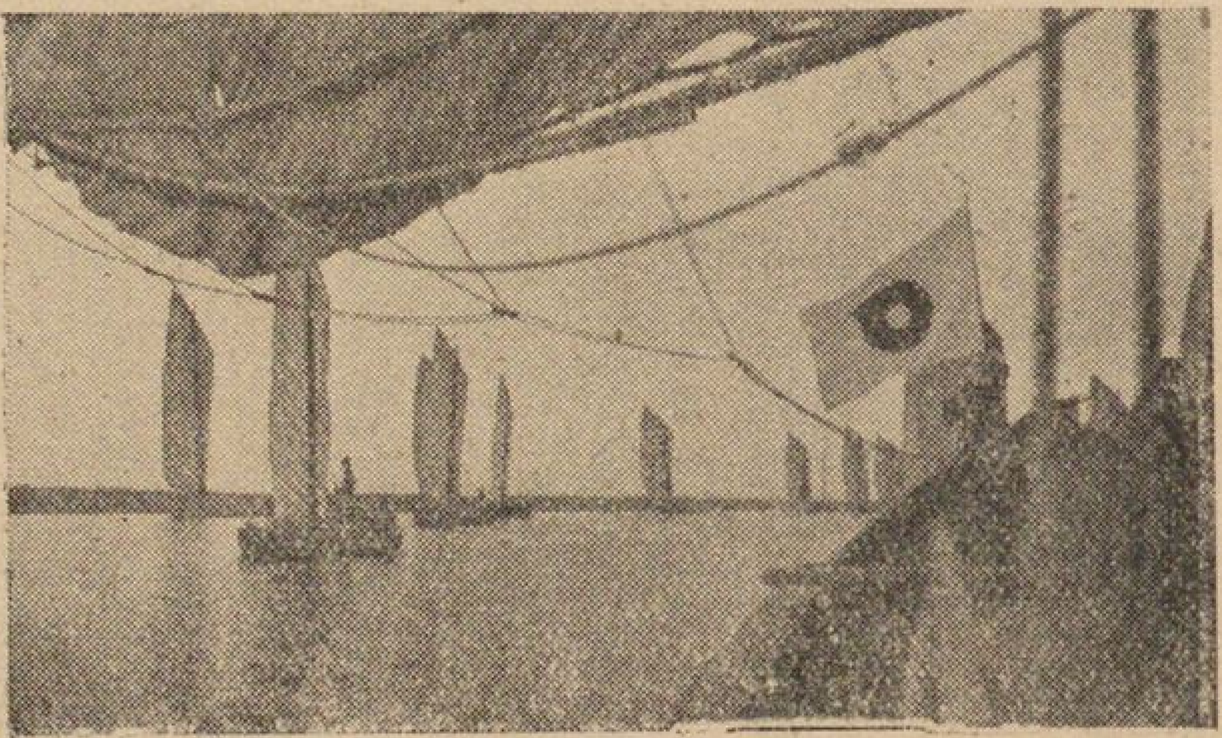
須藤賢

大運河と萬里長城とは共に支那古來の二大工事として人口に膾炙されてゐるが、大運河は隋の煬帝の開鑿せるもののみではなく、後世元代の開鑿を俟ち、更に明代の改築によつて、初めて現在見るやうな大運河となつたのである。

運河は煬帝の創始になるものでなくそれ以前春秋時代には既に相當立派な運河が開かれてゐる。

春秋五覇の一、呉王夫差は魯と共に齊を伐たんとして今の揚州より淮安に至る運河「刊溝」を開いた。（二四二八年前）その他戰國時代の諸侯が各地に運河を掘つて軍事上に利用したことが古書に見えてゐる。漢代には都長安と黃河を結ぶ運河が開かれ、穀物の輸送等に使用されて經濟的意義をもつて來た。

かゝる地方的な運河が南北支那を一貫して「大運河」の名にふさはしいものとなつて史上に登場して來たのは隋代であつた。



華北交通の船團（小清河）

隋の初代皇帝の文帝は廣通渠を開掘した。（一三五九年前）これは隋の都長安より東へ潼關に至り黃河に入る運河であつて、漢代のものを復活したのである。長安に近く東流する渭水があつたが、それは沙多く漕運に不便であつたので廣通渠を開いて東方の穀物を長安に運んだのである。

*

文帝の子煬帝は卽位後直に通濟渠を開いた。（一三三八年前）これは今の鄭州の西方汜水近邊より黃河の水を引き、東、今の開封、商邱を經て南し、淮河に合して淮安より更に南、揚子江岸に達したものである。黃河と淮河との間は汴河を改修したもので、淮安、揚子江間は呉王夫差の「刊溝」を利用したものである。この運河の堤防には大道を設け、楊柳を植ゑて長安より揚州まで離宮四十有餘を造り、充たすに美女を以つてした。帝は龍船に乘り、伴船數千を從へ、舳艫相接して二百餘支里、堤上には騎兵をして護衞せしめ意のまゝに歡樂を恣にしたと傳へられる。

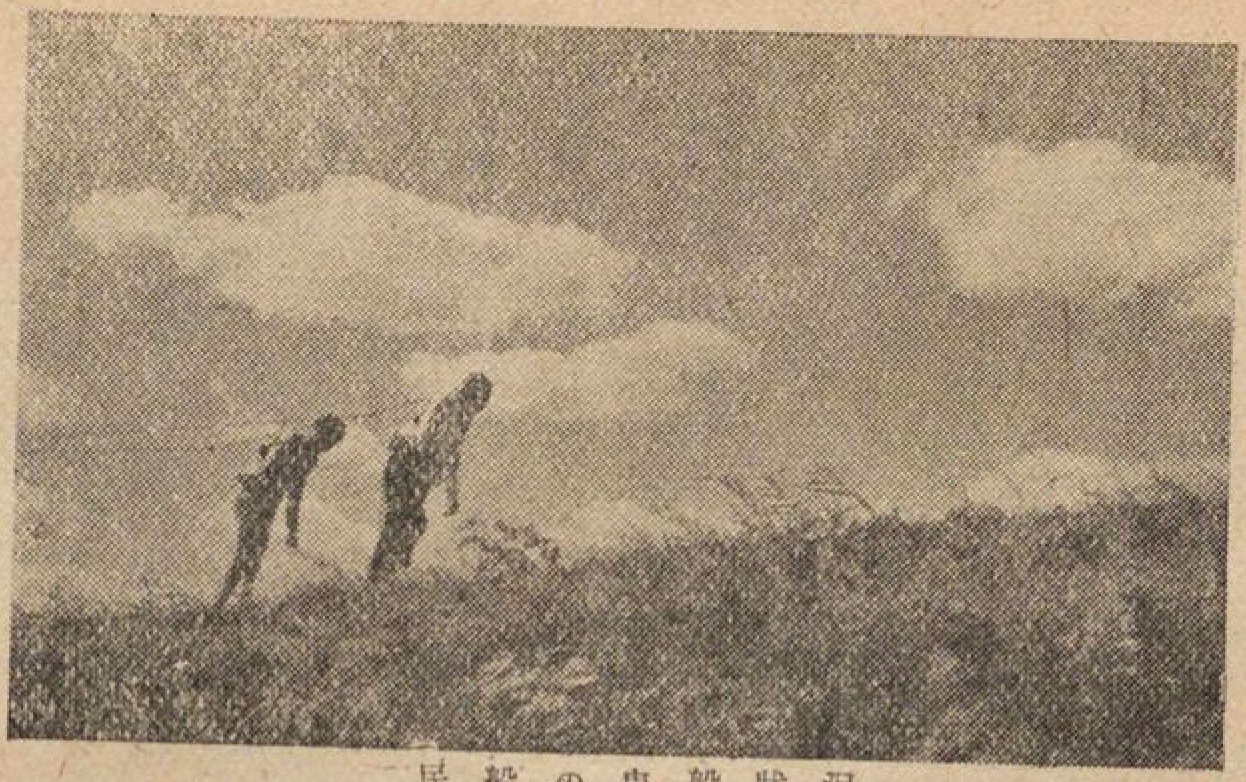
通濟渠開鑿後三年にして、煬帝は、河北の兵百萬餘を工に代へて、永濟渠を開かしめた。これは黃河と前の通濟渠との分岐點より北へ沁水に入り、沁水より東北へ衞河を經て天津に達し、更に白河を遡つて現在の北京近邊に通じたものである。この工役には丁男（二十一才以上六十才までの男）が不足したので婦女子まで使役したと謂はれてゐるが、これは當時、滿鮮に勢力を張つてゐた高句麗を征伐するための軍事輸送が目的であつたと思はれる。

更に二年後、現在の鎭江から杭州に至る江南河を開鑿し、こゝに南北支那を一貫する大運河が出現した。その長さは實に一千七百餘粁であつた。

ともかく煬帝はこの大事業を完成したが、兄の位を簒つて皇太子となり、病中の父を弑して皇帝となつた彼ば運河を開くに婦女子まで苦役せしめ、運河を使用するに逸樂を以つてした。運河を冒瀆した彼は高句麗征伐に失敗し揚州への船出の旅は卽ち彼の死出の旅となつた。揚州の離宮で逆臣の手により三十九才の一生を終つた。

*

煬帝の大運河が實際に利用されたのは次の唐代であつた。この大運河は南北支那統一の契となつて、唐代の華やかな文化が燦然と輝いたのである。大運河が大々的に利用されるに至つた原因は唐代に於ける兵制變革であらう。隋以前に「府兵」といふ制度が設けられた。これは農民の中より勇敢なる者を迎へて兵となし、平時は農耕に從事せしめ有事の際はそれ等を徵集して軍隊を組織する制度であつた。それが唐



民船の曳船狀況

代に入るや次第に傭兵制度に改り、兵農が分離するやうになつた。天子は自己の地位を守るため、その禁軍を多く都に駐屯せしめたので、彼等を養ふ糧食は以前より増大することとなつた。この需要を滿したのが江南の米で、運河はそれを輸送する重要な運糧河となつた。

唐は隋の大運河をそのまゝ利用し、諸所に穀倉を設けるなど漕運の制度も發達して第六代玄宗の時には年々都へ漕運される米は四百萬石に達したと謂はれてゐる。帝は長安の望春樓下に集つた船團が各々土産品を机上にならべてゐるのを見て満足してゐたといふことである。

當時、江南の米は通濟渠を遡り、そのまゝ渭水に入るには途中砥柱の險と稱する難所があるので、これを避けるため洛水に入り、洛陽で卸され陸送の後再び船に載まれて長安に運ばれた。かゝる繁雜な運送は水量の加減で時には豫定通り、米を都へ輸送し得なかつた。すると都は糧食が缺乏するので、天子は百官、軍隊を引率して洛陽に出て來て食にありつき鱈腹喰つて都長安に引き上げたこともあつた。

かやうに傭兵制度の旺になつた唐中葉以後に於いては國都長安は西に寄りすぎて糧食を得るに不便であつた。然し二百年の歴史は棄て難く、又貴族大官は長安に邸宅を有し、その附近には彼等の廣大な莊園などがあつたので、戀々として不便ながらも長安に終始した。次の後梁が起るや、國都は運河の便のよい汴州（開封）に定められた。ここは運河と黃河との合流點に近く、數多の傭兵を養ふには最も都合のよい所であつた。

以來、五代を經て南宋に至るまで約二百年間、ここを國都とした。その理由は全くこの大運河の漕運にあつたと云つても過言ではない。

*

宋は年々凡そ六百萬石の米を南方より運河に依つて開封に運んだ。宋の立國の根本は大體北支の武力と南支の財力を用ひ天下を保つにあつたので、南方より米の他、莫大な絹、銅錢、銀が都へ送られた。尙、南方の茶は商人に依つて運漕され、宋代文化生活の一特色である飲茶の風を盛ならしめた。

而て、南北交通の盛になるにつれて運河の沿岸には、都市が發達した。揚州、蘇州及び杭州はその大なるものである。

*

宋は滿洲に興つた女眞族の金に北支那を奪はれ、當時美術に耽つて政治を顧みなかつた風流天子徽宗はとらへられ、その子高宗は、辛じて運河に沿うて南走し、その終點、臨安府（杭州）に都して、南宋と稱した。（八〇五年前）

南宋の都は米の產地に位したので、ここに米の大漕運は跡絶えた。

金は北方人の根據地として恰好な位置を占める燕京（北京）に都した。金代明昌五年（七四九年前）黃河の河道が二分し、その一は南へ走り河汴を呑み淮河を合して海へ注いだのでこの方面の運河は亂れて、單に地方的な存在となつてしまつた。

*

次に勇敢なる蒙古人が慧星の如く現れ、金と南宋を伐つて世界的の大帝國を建設した。第五代の君主忽必烈は都を金と同じく燕京に遷して、これを大都と稱し、國號を元と定めた。

忽必烈は南方の穀物を大都に送るに以前の通濟渠を利用して開封に達し、陸路駄馬を以つて衞河に進み、船に轉載して永濟渠を過ぎ、更に白河を遡つて大都に着かしめた。これは黃河の遡航、陸運、轉載など勞多く效が少なかつた。

當時忽必烈は海運に力を入れて南方の米を海運で北送した。卽ち揚子江河口より出帆し海岸傳に山東半島を迂回して白河を遡航する方法をとつたが、半島迂回の際風波のため危險であつたので膠州灣と萊州との間に運河を開鑿せんとしたが、これは、水源の不足と岩盤の掘開困難のため、不成功に終つた。

仍て、忽必烈は泗水を利用して濟州河を開き、以前の「刊溝」を濟寧につなぎ更に汶水を利用し、金の黃河故道に沿うて利津に達し、海に入つて天津へ向ふ方法をとつたが、海口が閉塞したので、濟寧の北方より陸路臨淸に達

して永濟渠を下つて天津へ向つた。これは開封を迂回するよりも近道であつたが、又陸運のため轉載の勞が多かつた。そこで忽必烈は至元二十六年（六四五年前）濟寧の北方安山より臨清に達する運河を開き水門二十一を造り渙水を節した。忽必烈は自からこれを會通河と呼んで悦んだ。

この會通河の完成に依つて杭州より北京に至る現在の大運河の大體の形が整へられた。然し相當無理をして開いた會通河は河道悪く、年漕米は數十萬石に過ぎなかつた。忽必烈は大都の食糧問題を解決するために專ら海運に習熟せしめ、ともかくも年三百餘萬石の米を北京に送つた。

＊

元を伐した明は一時今の南京に都したが第三代の永樂帝の時金、元と同じく北京に遷都して現在の北京城を築いた。

明は元と同樣にして運河、海運を合して年二百餘萬石の米を北送したが、倭寇の出沒頻繁となり、海運は跡絶がちとなつたので、運河の修築に全力を注がねばならなくなつた。黄河の氾濫を恐れて、湖西の運河を濟寧の南で湖東に移し夏鎭を經て韓莊に至り、更に東方迦河に連ぎ南下して宿遷に至る河道とし、又元代の木を石閘閘に改築したりした。（三三九年前）

＊

次の清は明と同じく北京を國都としたので、南方の米を誘致するに苦心した。その頃、運河沿岸に土匪が横行したので雍正帝は達磨を信奉せる羅と云ふ僧侶に命じて貢米の漕運に當らしめた。羅は宗教の力を以つて募集した一千餘の配下を使役し、運糧船約二千隻を無事北京に運んだ。これ等の者がやがて青幇となり、運河をその繩張りとして拔くべからざる勢力をもつて來たのである。大體清の中期まで年約四百萬石の米を北送したが、淮安に漕運總署を置き、江蘇、浙江の二省の貢物は歳額米二百萬石以外は銀兩で代納せしめた。又漸次海運が發達したので光緒二十五年（九四年前）漕運が停止された。

朝廷の運河使用が少なくなるとともに河道の修理、保護が等閑にされ、大運河は次第に淤塞し、現在見る如く、臨清、舊黄河間の會通河は全く杜絶し畑地と化してゐる。又濟寧以南の明代の運河も東方山地より流れる諸河川の流沙に淤塞せられ、現在は南陽湖、微山湖中を辛じて民船が通つてゐる有樣である。

＊

要するに、初めは國都の位置が定まり、それに糧食を運ぶために運河が開かれた（漢—唐）が、次に國都は糧食を得るに便なる運河の近邊に遷つた（五代—宋）。而て北方民族の國都がその故地に近い北京に建設されてからは（金、元、清）宋の都開封を迂回する運河を東へ移して江南と北京との距離を短縮した。かやうに大運河は一國の政治に重大なる關係を有し、古來運河に意を用らるること大なるものがあつた。然るに歴史の然らしむるところ、海運の發達、鐵道の敷設等は、大運河をして全く地方的なものにしてしまつた。利に賢い白人すら内河川には手を出しかねた。それほど北支那水運は困難な事業となつてゐた。

＊

支那事變後、大運河のみならず北支内河川全體の客貨輸送は華北交通に於て經營することになり、茲に再び大運河は曙光を浴びて登場して來た。

現在華北交通經營の大運河は北運河（通州—天津間一四三粁）、南運河（天津—臨清間五四〇粁）、山東南運河（東河—台兒莊間二九〇粁）及び中運河（台兒莊—平橋間三〇〇粁）に區分されて運營されてゐる。

穴居概觀

松村征二

世界の數多くの地方でも、古代には穴居生活が屢〻傳へられてはゐるが、その古代居住の一樣式と見なされる穴居が、文華開明以來三千年のこの方、依然として現在にまで傳へられて來た北支の現實を見ては、大抵の人が、この時代をかけ離れた傳承に驚くのである。そして他の面では、その三千年を通じて、別に宮殿建築を中心に家屋居住の技術は、幾變遷を經て來てゐる。にも拘らず、何のためにか家屋居住に遷移することなく、土窟の居住に執着占居するものであらうか。

或る人は、古代文化の發祥地としての黃河中流域は、他の世界文明の場合がさうであるやうに、現在よりも氣候土壤、引いては產物も惠まれた條件にあつたであらうと考へて、この天賦の豐穰こそ諸民族抗爭の對象となり、舞臺となつたに違ひなく、四方の外族交交侵入して、却て漢民族の安榮は許されなかつた。この外族の侵入に伴ひ、政治狀態は屢々惡化し、その都度流賊の慘害は域內を席捲した。斯る狀態に於ては、良民は穴居に避難せざるを得なかつたであらうと云ふ風に推論してゐる。

これは、一寸そのまゝ受取れないが、筆者は日支の此の度の事變でも、都市の住民が多數穴居地帶に避難した話を聞いた。

忻縣等では、ずつと西方の黃土地帶に逃げたと云つてゐたが、その折は穴居の貸間が拂底して、土窟一間の月家賃八〇元を取られて堪へられず、皇軍入城して治安が保てるのを待ちあぐね急いで穴居を退却して來たと云つて苦笑した小父さんが居た。

この黃土地帶の土層及び地形條件に適應した風習は、今尚實行されてゐて時には家財道具は勿論、婦女子など人間迄美事に匿してみせるのである。こんな事から前述の如き推論が暗示を得て導かれ得るけれども、穴居保守の理由は、もつと普遍性を持つたものがあるであらう。その中で考へられるのは黃土の性質が極めて掘り易く、家屋建築の如何なる形式よりも容易にそして安價に設計し、作業し得ること。大陸的な氣候では、室內氣溫を夏は涼しく多は暖からしめること、建築材としての木石に惠まれぬ黃土地帶では特に有難いこと、居住のために耕地をつぶす必要がより少くてすむこと、雨が少いので十分凌げることと云ふ樣なものを擧げ得ると思ふ。

要するに生產力の高くない（灌漑の望めない）黃土堆積原の階段耕作の崖や、地罅に住む農民たちには、より高價につく、そしてより無駄の多い家屋居住に、贅澤を求めて移り住む程の余力に乏しかつたであらうと思はれる。

穴居が古代どの程度重要な居住分野であつたかは、余り資料の賴るべきものがない。たゞ支那の文字の起源から考へて、周から秦にかけての樣相が若干偲ばれるし、考古學的な資料によつて、周以前から石器時代へ溯ることが試みられる。これに漢魏六朝の文獻に現はれた字句から模索を加へて以下略述してみる。

民國十年、アンダーソンが河南省の仰韶村（澠池縣）で、新石器時代後期の文化遺跡を發掘した折に、紅土層の中に袋穴が現はれた。それは、圓筒形（垂直）のもので、直徑が約二米、深さは五〇糎から一米半位であつた。これに對してアンダーソンは、佛國のアルサス地方のアーヘンハイムに發見された、新石器時代の居室と物置とに兼用された圓穴について、フオレルが記載したのを參照して、甚だ相似てゐることから仰韶のも居住遺址でないかと推測したが、まだ斷定はされぬと述べてゐる。

この仰韶文化の時代は約三千年前で虞、夏の頃のものと思はれてゐる。

其の後、民國二十年には北平師範大學、山西省立圖書館、米國フリール美術館の聯合で、山西萬泉縣荊村の石器時代遺跡を發掘したが、その折も同樣の圓形の直立した袋穴を發見した。四壁が穹窿狀になつて、上方の穴の口が稍〻小さくなつてゐる。底部の半徑約四米、深さが三米で、文化層で埋つてゐて、その中から骨、石、陶器が出て來た。多數のかうした穴の址が交錯相重なつてゐたので、其の間には前後かなりの時代が過ぎてゐるものと思はれる。尚、この時は別に圓形の竈も發見されてゐる。

この後、民國二十二年、河南省政府

第一書房

新刊

東京麹町區三番町
振替 東京 六四二二三

岡田正三譯

各巻價三圓五十錢 送二十錢

プラトン全集

第三巻 配本中

果然好評の本邦最初の原語譯プラトン全集愈々第三巻出來。パイドロス、リシス、小ヒピアス、カルミデス、ラケス、イオン。譯文の流麗明快は大思想の本質を傳へるに無比の適切さを示し第三巻に到つてプラトン獨得の對話篇の特色は益々鮮かに發揮されてきた!!

田邊元博士より譯者への書簡 當今飜譯が正確の一方に重きを置く結果讀み易さが閑却され原文が讀めないものには飜譯も解らぬ傾向を遺憾に思つてゐた所、御高譯は其點に於いて小生の希望に適ふものであることを嬉しく思ひます。大ソクラテスの自由無礙なる對話の妙が極めて自然に生き生きと我々の言葉に移されてゐます。(後略)

大橋青湖著

釣魚夜話

親しい友人と語るやうに書かれた魚と釣魚の隨筆集。これまで釣に少しも興味をもたなかつた人々にも面白く讀め乍ら釣とは何かが判ります。

價一圓八十錢 送十五錢

友枝宗達著

戰ふ獨逸

現在なほ獨逸にあつて報道戰線に活躍せる著者が、最近四年間の情勢を外交、軍事、評論、社會、文化の各方面に渡り觀察した新鮮な報告と批判!!(奥村情報局次長序)

獨逸は今や戰つてゐる。懸命な必死の戰列を進めてゐる。この激しく昂揚された國家の内部に生活して一日本人たる著者は何を感じ何を考へたかが本書に明確に示されてゐる。戰ふ友邦の力强い姿は同時に我々自らの姿でもあらねばならぬ。戰ふ獨逸を戰ふ日本は知らなければならない。なほ情報局次長奥村喜和男氏また切切たる序を寄せて戰ふ國を禮讃す!!

價一圓五十錢 送十五錢

と中央研究院が協力して、濬縣の遺址を多數發掘したが、その劉村では仰韶期の六㕕陶窖と共に、やはり直立式袋穴を發見してゐる。この袋穴の口徑は一米八、底の直徑二米、そして周壁は穹面になつてゐなくて圓錐面になり、府には平らな天然石が舖いてあつた。その中に堆積してゐた文化層の間には燒土、彩色陶器、鹿角、蚌殼、麻韆、獸骨等の人類生活の遺物が雜つてゐた。

この時代のものは、口より底が廣いけれども、同數の辛莊に見られた黑色陶器時代のものは、底と口と略〻同じく、また全體として大きな廣さを持つてゐる。また、灰色陶器時代のは更に形が大きく、また口徑が底より大きい。以上の諸例から新石器時代の末期には直立式の袋穴が河南、山西に散布してゐて、當時最も普通の居住樣式であつたことと推測されると思ふ。そしてその穴の大小はその用途と穴の上部構造の技術に由つて各〻異つて來るであらう。

また有名な安陽縣殷墟の發掘に於ても圓形、楕圓形、方形、長方形、菱形など、各種の坎が知られてゐるが、その中、長方形のものが最も多く、幅一米、長さ一米九（圓形の坎も直徑一米九となつてゐる）屢〻その方向は正南北になつてゐて、皆直立壁が平滑である。たゞ深さが區々で、深いのは十米にも達するのがあり、また中には壁面が階段狀になつてゐるのは、數個の穴が時代を異にして、重復掘鑿されたものであらう。

また搗き固めた長方形の土臺——その周圍には天然圓礫の柱礎（土臺石）がある——が發見され、その近くの地下に長方形の大きさ約十米の穴があり階段で上下される樣になつてゐるが、その中には陶片、牛骨、狗骨等があつて、穴居の遺跡と考へられてゐる。

この種の穴は面積大きく、周壁は極めて堅い土が張つてあり、時には數個の圓い穴が相連接して、一族の集團穴居を偲ばせるものがある。これらの穴の位置が先述の舖盤土臺——宮室式建築の基礎？——よりも下にあることは宮室以前に營まれた先住民の住居樣式であると思はれる。尙、此等殷墟の年代は、盤庚十四年から紂の亡ぶまで、二百七十三年にわたると推論されてゐる。

以上の古代竪穴式穴居を概觀すると初め圓い平面形——殷遷都以前か——から時代を降るに從つて、殷初の楕圓・方形・長方形・菱形などに變化して來る。この事はエヴアンスがクレテ島の史前遺跡について述べたものと一致する。

また、口徑が底徑より小さいものが古く、その相等しくなるのは時代の新らしいもので、その四壁の壁面が粗糙なのは古く（仰韶期）、新らしくなると直壁になる（殷墟）。時には逆に口徑が底よりも大きい灰色陶器時代のものがある。

また、その穴の上を如何なる形で覆うてゐたか分らないが、或る學者は、甲骨文字の宮の字と、殷墟の連接した圓穴とから推測して、茅草の類で、日本の天地根元宮造りの樣に覆はれたのでないかと考へた。

今、更に文獻に依つて其の後の狀況を考へてみると——以下古文は固くなるので省略するが——殷末、周の祖先が居た渭水の流域では、まだ家屋の結構も知らず、穴居を營んでゐたと詩經に見える。周易にも穴・坎・窨などの句があつて、周初の樣子が窺へる。

他面、殷より周初にかけて宮室の制は發達して來たのであるが、尙窖・藏の習は勿論、穴居も周末秦漢にかけて依然行はれたことが、左傳や史記にも見られる。

ついでに周秦にかけて用ひられた篆籒文から穴居に關係する文字を拾つてみると、凡そ五十餘字あるが——その外に略字、增字及び今では傳へ用ひられぬ廢字がある。その中、少數の動詞を除くと、形容詞又は名詞が最も主要なものである。形容詞では穹、空、窄、窅、窈、窕、窔、窵、窐、窮、窘、窶等がある。けれども、これは直ちに穴居生活に伴ふ生活感と、關係あるものと云へるかどうか、研討を要する。そこで名詞について、先づ居室と思はれる部類を擧げてみる。

宸—天子の所居。窋＝窟＝窩。空—古は窟や室に近い意味があつたと思はれ司空といふ周の官名はこの意味で用ひられる。笧—北方で土穴を戸といひ、これに住む＝土屋、窟—前述の袋穴に近い皿形の土屋を思はせる。復—地屋、地下に土を累ね土を覆ふたもの。窖—土室又は窨＝窟、穴—土を穿つ象による。穴は穴居の戸門によるとも云ふ。

尙、人類生活に密接な建築名詞を左にあげてみる。

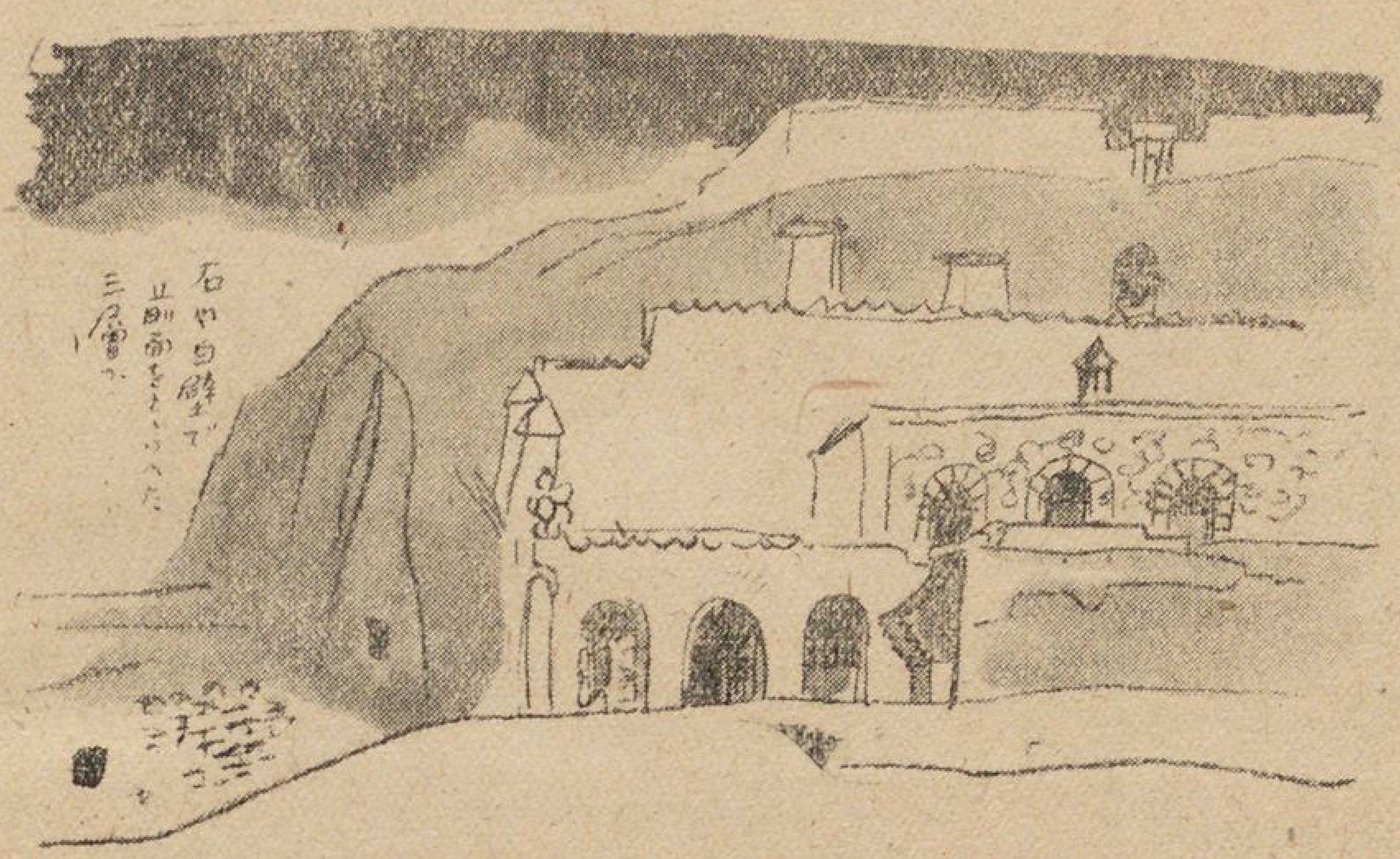
1、墓穴‥‥穴、窆、窀、穸

2、牢厩‥‥窞(兎穴)、窼(鳥穴)、窵(同上)、窂(牛馬穴)、窩(同上)、窠(鷄、雉、雊、鴿の巣)

3、倉庫‥‥竇(圓形)、窖(方形)、窨(酒水用、又は蠶室)、窌、窇、窲、窖、窱

4、陶窯……窯、窰、窑、窯
5、庖廚……竈、竈、窖、寤
6、坎坑……穽、窂、窞
7、其他……窗(まど)。窟(くどり)、突(煙出し)、窨
(暖簾)

更に興味があるのは『窋』の字の暗示と共に、その前驅をなすと思はれる



前述の平底壺形の存在が、文字の上に尋ねられることである。

詩大雅箋、說文及び月令などに依ると、穴は直下に向つて掘られたものでその口を中霤と云つた。それから考へると、上邊を一部蓋覆して中霤をよく狹くしようとした形が考へられ——これを復といつたらしい——覆蓋の下が家族各々の座敷であり、中霤は覆蓋の中央に開けられた明り取り(天窓)でありその下は雨水の溜り場でもあつたと思はれる。

更に覆蓋の下が仕切られて、四室を劃したり、四壁より更に横に穴を設けた形式も漸次生じたであらう。月令の注などでは遂に霤は室で、その中央の室が中霤だといふ風にまでなつてゐる。斯う考へて來ると、平底壺形の袋穴から現代の支那家屋の間取りに見る四合兒房子と院子の形式の淵源が想像されると思ふ。

降つて漢魏六朝となると、中國の都市文化が漸く發達すると共に、穴居に關係ある字句は甚だ少くなる。併し周邊の諸民族については、村落が穴居群から成つてゐる例が多數あらはれて居り、また都市の周圍や一部にさへ、穴居があつたであらうと思はれる事情がある——後述——。そして當時、邊疆民族の穴居が主としてその上に梁木を架して土で覆ひ、その中に戶口を上に開けて居ることが述べられてゐる。蓋し周から漢唐にかけての間に、中霤を持つ袋口から、窨と呼ぶ坎中の坎が中霤の下や横にあけられる變化を辿つて來て、更に中世以後の横穴式に移つて行つたのではないかと思はれる。併しこの過程はまだ斷定出來ないもので、或は右に述べた上代に於ても、地罅や階段耕作などの黃土崖には、横穴があつたものかも知れない。そして沖積土である平地に於て、特に竪穴が選ばれたのであるかも知れない。

殷墟も仰韶も濬縣も平地であつたし荊村もあまり傾斜してゐない黃土原上にある。この荊村の場合を除けば、山間盆地では、沖積土が黃土よりも不等粒であるために崩壞し易く、そこに穴居をしなければならなくなつた古代沖積原文化の端初に於ては、竪穴を取る方が便利であつたかも知れない——毛傳に其の壤に窯の形に竪穴をあける。壤は柔かなもので、柔らかければ崩れ易い。だから之に竪穴をあけて横穴やアーチにしたりしない。壤に竪穴をあけることを正鑿といふと言ふ風な記事が見える——。併し黃土堆積地帶では横穴が可なり古くから有り得る樣に思はれる。

最後に近代の穴居の形式に就て說明しなければならぬが、まづその穴居の居住を土民は土窰といふ名で呼ぶ。

さて、穴居の設計を間取りから見て行くと、土窰が一方向の壁面に穿たれたものが最も多く、この內部は戶口の横の窓に近く(窓がないこともある)竈が片方にあり、その內側か他の片方に日常用具を置く樣になつてゐる。この物置場や竈は別に掘り加へられることもある。その更に內部の兩側(片方のこともある)に座敷がある。普通これが居間であり、寢室であるが、室の奧行を深くして、中途に一寸した仕切りを磚などで作り、その奧を寢室に宛てゝゐるのがある。もつと大きくなると、仕切の手前から横に一方、または双方へ通路を設けて隣室に密室を用意

する。蓋し奥への延長よりも、横へ擴張することが採光上便利であらう。

　併し土壁が┓型に切り込まれた處に各〻二面の壁に穴を明けたもの、及び┏┓型に切り込んで、その三面の壁に穿つたものがあつて、壁でない方面を牆で仕切つたら、四合兒房子の一邸宅に近くなる。更に四角な大きい深い坎が掘られて、階段でその底へ昇降出來る樣にして、その四壁に各〻二三個宛穿つた完全に四合兒房子に一致した構成になつたものがある。

　┓型や┏┓型の前庭は院子と云ふだけであるが、四合兒型の場合、中央の大きな坎を天井ともいふ（その底が勿論院子である）。だから俗にこんな型を天井院とも云ふ。恐らく天井は前に述べた中霤の進化したもので、この中に更に横に穿つた土室は、古文の窨の系統であらう。かう見ると平底壺形竪穴と天井院と、そして四合兒房子との系統が、一つのものでないかと思はれて來るが、併しこれは尙今後研究さるべきもので、穴居と家屋居住とが三千年來並存して來た華北では、その各建築樣式が、双方から互ひに相影響したと思はねばならぬからである。

　尙この天井院が一箇の家族でなく、既に相當の部落と見なしてい〻程に大きいものもある。そこでは一家族から一氏族へ、そして一戶から一聚落への進化が實に典型的に展觀される。この好適例を筆者は西安の城內で二つ見たことがある。恐らくこの方面に氣の付かない一般の人々は、何のためにこの深い大きな二つの坎が掘られたのか、理解し得ないだらう。そしてその底に井底の痴蛙よろしく蠢く人と豚の子の群を異樣な感じで眺めて首をかしげるに違ひない。

　クレツシーもこれを見てゐるが、あまり解答しようとしてゐない。筆者はこれが唐の頃にもこの樣にして西安の一劃を占めてゐたのかも知れぬと思つてみたことがある。

　尙二三部門の建築物に就て述べる。先づ戶口と窗であるが、その上邊がアーチ形になつてゐるのは、土層に對して、最も適應した設計といはねばならぬ。同じく乾燥地帶の石灰質土層地域に住むアラビヤその他の、西方アジアの樣式と、その點一致した結果を得たものである。この土層穴居から離れて既は瓦石の房室に住む樣になつた西部支那の住民も、尙このアーチをそのま〻傳へてその家屋に用ひてゐるのは興味あることで、山西の村落で、斜面に相重なる民家群が同じ樣なアーチ形の窓と戶口をあけてゐるのを見ると、恰も一個のビルディングを見る感じがする。

　煙突は上の畑に突き出したものがあつて、實に異樣な發見？に苦笑させられることもあるが、中には竈から斜前方に誘導されて、戶口の斜上方の壁面に出口をあけたのがある。雨も落ち込まぬといふのが覘ひ處かと思はれる。

　牆や門が院子の前に構へられてゐるのをよく見るが、居室は土窟でも、この門牆は美しい磚と瓦と、そして丹青の梁柱で裝はれてゐるのも面白い。この傾向は家屋居住に對する憬れを物語つてゐると思ふが、これが更に强調されて來ると、院內に倉庫や客廳（應接室）を建てたのもあり、戶口の處も屋根が飾られ、柱梁が立てられ、そして壁面は磚で張り裝はれる。

　またこれと家屋の間には、住居の後面に天然の壁を利用して、平屋根を張り出してゐるが、前面から見ると穴居と略似た型式のものもある。こんなのは一面厚くない黃土地帶で、而も嘗て人の穴居してゐた黃土が侵蝕されて來て、彼等居民を穴から追放するためにも起る現象で、石太線の沿線や南同蒲沿線では殊に多く見受けられ、殊に前者は石礫で營まれてゐるので面白い。

　また、天井院式の牆壁は、天井の上緣に沿うて方形に築かれてゐる。これを見てゐると、外敵への備へであることは言ふまでもないが、もつと日常生活に於て受けるより一層の利便は春の畑を拂つて來る風塵を防ぎ、夏の暴雨による流水を防ぐことにあり、また彼等一家の樂園である院子を上から見下す他人の眼から遮ることであらう。

　そして支那家屋の屛牆も——或は城市の城壁も——かうした原始的な型式の中に起源が推想されて來ると思はれる。少くとも天井院の牆壁が家屋居住文化に模擬したものか、或は却てこれから支那家居の牆壁が進化して來たものかは、興味ある研究題目だと思はれる。

　また牆壁の一種で院內を二分するものがあつて、これで前院と後院とに分たれてゐる。尙、これら穴居には、殊に天井院型のものには牆壁の一個處に碉樓（見張り臺）がある。この碉樓には院子から上る樣になつてゐることもあるが、中には奥の一室から長く穿たれ、孔導の階段を傳つて上る樣に、周到な注意が拂はれたものもある。この碉樓は他の形式の穴居にも單一家族で持つてゐるが、時には穴居群——村落で用意されてゐる。

北方瓷の鑑賞

武智早苗

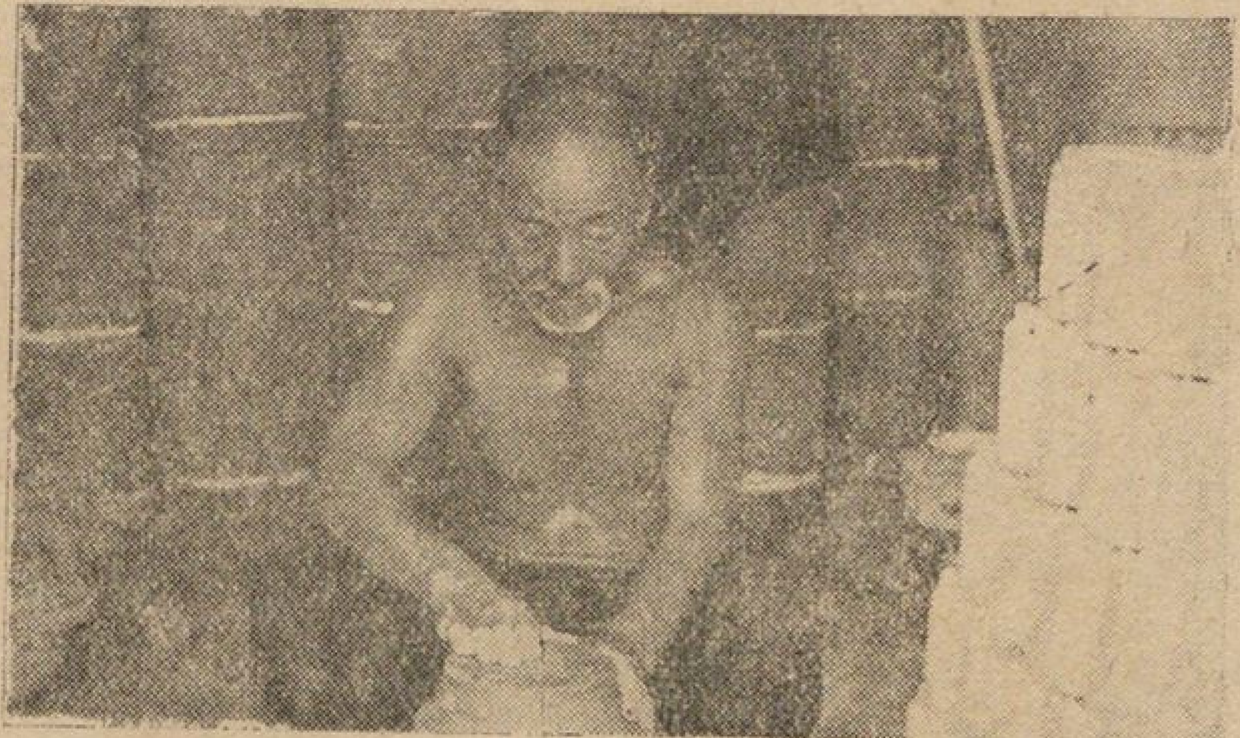
黄河がみづから、奥地の天山山脈や不毛の準平原から運んで來た微細な沈澱物、すこしの乾燥にもすぐセメント質の粉狀となつて空たかく舞ひ上るもの、而も鑛物質の吸收性に富み、農作物にはありがたいが、洪水を起しやすく、水運を妨害し、また陷沒性海邊に近づけば、アルカリ性地帶をつくる。

このやうに、功罪さだかならぬ黄土が、地表を深く掩ひつくした北方の、その黄土層の間に、北方瓷は地の星の如く夥だしく散亂してゐるのです。そしてその黄土層とは、揚子江以北の支那本土の大部分を占め、山西臺地、秦嶺、山東山地、北支那連脈の興味ある四つの山地を含んで居ります。そこに住めば、人間も黄土を呼吸し、黄土が溶け込んだ水を飲み、まつたく黄土の蟲にならなければならないやうな、そこは黄土一色にぬりまくられたところの大陸性亞熱帶地方なのです。

そして又、この土層の歴史と云へば宛らあの黄河の濁流うづまく氾濫のやうに、嘗ては東洋文化の源流地であつた中原も、北宋の崩壊以後は遽に衰微して、幾度となく南北兩勢力がひしめき合ひ、道義は廢れ、兵亂に踏みにぢられて、不作の曠野と化した敗北と荒廢の歴史があるだけです。

このやうなところで燒かれた北方瓷は如何なる性質を持ち、如何なる歷程を辿つて來たものでせうか。

――しかし北方瓷は、この黄土で燒かれたものではありません。黄土が埋め殘した山地の土で主に燒かれてゐるのであります。黄土層はただその製品にあたへた文化の母胎の役目をば果してゐるとだけ云へませう。



陶磁史の立場から見ますれば、北方瓷もやはり、天目、堅緻燒土器の時代を經て、鉛釉、ガラス釉時代に至り、青磁時代、白磁時代となつたものと思はれますが、しかしその背後の文化的要因として、北方佛教の消長が意外に大きく影響してゐることを見逃すことは出來ません。殊に定窯などは、佛教文化の賜であつたとさへ云へませう。

しかし、各時代のうちで、もつとも興味ある研究の對象となり得るものは云ふ迄もなくあの優秀な宋瓷を燒成した宋代の諸窯の研究であります。

南方瓷の黄金期が明代であるとするならば、北方瓷のそれは、宋代であると云はなければなりません。

けれど宋代以後における、北方瓷の顯著なる傾は、及ばずながらも南方瓷に拮抗せんとしつゝ、西域傳來の作行はあくまで守つて、傳統と創意にくるしみつゝ、あらゆる不幸な條件を克服せんとしてゐたことであります。そこから、あの見事な鐵系統の釉藥が發達し、また鐵砂文や、磁青の效果的な描線の美が偶然生れ出たのであらうと思はれます。しかし遂には南方瓷の天恵には、はるかに及び難くなり却つてその模倣は俗惡味を帶びるやうにさへなつて行つたもの丶やうに見受けられます。そしてその販路も、僅かに華北一圓に及んだのみであつたのであらうと思はれます。

元來、北方人は無器用で、進取性がなく、潔癖性がなかつた。朝鮮瓷のもつあの詠嘆的な多種多樣な創意は北方瓷には求められない。黄土層に育つた生活程度の低い生きることのみに汲々としてゐる貧乏さは、無骨な、ひづんだ茶碗などに對する神經を無くした物のやうです。まして陶器に繪畫や、造形の美のあらうことなどは、北方人には思ひも及ばなかつたことでせう。北方人にとつては陶器は純然たる工業製品に過ぎなかつたのです。それも山地では農家の副業でさへあり、傳へられた工藝美の技巧さへも、徐々にはぶき忘れられて行つたものであらうと思はれます。藝術的意慾などは少しも感ぜず、たゞ住民の低調な需要に應じるために、無心に人形や玩具に赤繪を塗つた陶工のこゝろは、子供が繪をすくほどの野心もなかつた筈です。しかしそこには名人藝ではないけれども、無意識に拾得した生產のための神祕なる熟練がありました。一代の經驗ではなく

數百代の經驗が集つて、あのやうな窯業への精進を得せしめたものがあります。部厚なところをわけもなく削りとつて、その跡を匿さうともしなかつたその素直さと、無神經さ、または、蓋物のいたゞきにつけるツマミを作るにも、その頂から少し離れたところの土を抉りとつて、それをそのまゝまるめてひつつけてゐるものがありますが全くずぼらなやりかたです。顔剃りのとき、剃りあつめた汚物を一時額の上にこすりつけておく、あの支那床屋のやりかたを連想さへするではありませんか。このやうに北方瓷には感傷はみぢんもないのであります。たゞ男性的な敢闘のけはひと徹底的な生産主義がそこはかと感じられるだけなのであります。



しかし、此の様な粗奔な作行の北方瓷の理解は、はげしい俗念がありながら、それを非常な努力で克服し、放下し得た人によつてはじめて可能なのではないかと思ひます。夢中でかけば、狂人の繪でもたとへやうも無く美しいやうに、北方瓷の見どころは、その眞摯な他意のない際どい粗拙の美しさです。土俗美にも通ずる、あの生活に即した餘裕のない差迫つた美しさです。

小說でも、優れたものは、性格が如何にして變つたかと云ふことが底流になつてゐます。人間でも眞實をつき徹すために性格が變る程の激しい生活をして來た者でなければ役に立ちません。さう云ふ性格に試練をあたへるものを我々は悲劇と呼びますが、その悲劇を禪意をさへもつて少しも避けず、少しもひるまず戰ひ拔いて來た者にのみこの北方瓷の持つわびしさは判るのであらうと思ひます。男性の持つ一種の避け難い悲しみです。利休や芭蕉や良寛や一茶は、このわびしさに徹し得た人でありませう。

あのいびつな宋瓷のやうに、いかにゆがみ傾いても、本來の正しさは少しも失はうとはしないかのやうな心根、そこには、せつぱ詰つた人生を傷つきながらもやはり勇ましく生きてゆかうとするけなげな意志が感ぜられるやうではありませんか。

また、北方瓷には、それを作る人の息使ひや、指先の動きや、血の流れる音までも聞えるやうな感覺がありますし、わられることをも覺悟の前で、落ちつき拂つてゐるやうなところもみえます。また、器物全體にかゝる引力の力を、しつかりと小さな足で支へてゐる呼吸も伺へます。調子外れて踊つてゐるやうな動的な表現もあります。そしてそこには陶器と人生に通ふ一如な嚴肅な寂寞さがそこはかとなく感ぜられるのです。

南方瓷には、そのやうな感性は比較的乏しいのであります。朝鮮瓷の靜かに流れるやうな律動の美しさは北方瓷に於ける太陽の輪轉の如き情熱です。

ある人は『燒物は破れるからいけない』と云ひます。私にはその意味はよく判らないのですが、もし破れない陶器があつたらいゝとでも云ふのでせうか。陶器はよく破れるために潔い感じさへするのではありませんか。

宮廷の調度であり、破れにくゝ高貴な玉の盌などに、陶器の持つ深い威嚴と品位があつたでせうか。不變なるものは、謂はゞ無生命のものであり愚鈍

な感じをば抱かせさへするものです。

陶器は破れるのです。麁相なふるまひに逢へば必ず破れるのです。その破れるものを叮嚀に取扱つて破るまいとする愛物の心、それは最早、所有慾では無く、完成に近い社會人の心です。

明智光春は、安土城で討死する時、祕藏の茶器、新田肩衝、楢柴肩衝などを唐織の蒲團に包んで攻め寄せた太閤軍に渡したと云はれてゐます。これは何う云ふ事でせう。世界の何の國に此んな名將があつたでせうか。彼にも懷疑はあつたでせうし、自分の死後のことまでも信ずることは出來なかつた筈ですのに、彼は此の不可解な宇宙を信ずるが如くして死なうとしたのです。それは、あれ程の懷疑者であり、且つ唯物主義者であつたモンテニュが、最後まで王政派であり、合掌して瞑默したのとよく似てゐる。またそれは死期に臨んで身を正さうとする人々の有終の美の精神でありませうし、唯物論者なるが故に、思惟の限界を知り、精神及び宗教のありやうを悉知してゐたのであると云へるでせう。

時々刻々、世界は變りつゝあり、動かぬものは何一つとして無いのであります。私達はその動搖の中で、皇民としての道を踏んで生きて行かなければならないのですが、その動きが激しければ激しい程、不思議にもわれ／＼は永遠なるものを靜謐なるものを希求しがちです、しかし靜は動の中に實は存してゐる。愛陶家は祕藏の盌を投げつけて破つてみれば永遠の事が判るでせうし、武士ならば劍を拔けば靜謐な心に通ふことが出來るのでありませう。

我等東洋民族は、保守的で、草食的で餘りに永遠なるものをあこがれる民族です。けれども、今は眞の平和とは創意であり、戰ひであることをもはや知らねばなりません。溪流の水が常に冷たく淸らかであらうとすれば、永久に流れ渝らねばならないのと同じわけです。

我々は靜なるものより動くものに眼をむけなければならない。動くものを睹る眼は眞理と豫定を活用する眼であると云へませうか。蓋し陶磁を睹るのにもそんな眼が必要なのであります。

北方瓷の茶盌などの見込みに殘つてゐる、溪流の渦卷きのやうな轆轤跡や又は左卷き右卷きの精絕な糸切のあとそれから又あの轆轤の廻轉する速度までも見えるやうなクテベリのゆがみ、石鹼の上を爪で引搔いたやうな陰刻の篦づかひ、磁州系の黒花の生きて動いてゐるやうな元氣のある描線の樣は、どうであらう。

北方瓷には生命が感じられると云ふのは、そのことであります。この動的な表現の感覺を通して私達は生命ある陶磁への鑑賞を致さねばなりません。

併し、陶磁の研究は歷史のやうに考證や政治的理由のみで達成されるものではなく、純粹な藝術のための藝術と云ふやうな學術的立場からなされなければならず、又その觀賞そのものが、現代の文化樣相の鋭い反映であらねばなりません。破片の分布狀態や窯跡の踏査や、碑や傳說を尋ねてあるき、縣志、希覯本を調べ、用意周到にして追求しなければならないのであります。

陶器の美學も、また繪畫彫刻に於ける如く、常に一定ではあり得ないのでありまして、我々は常に民族の感情と共に經濟を考へ、陶磁の生命あるその觀賞を各科學の分野に於て廣めねばならないのであります。しかし、北方瓷に關する文化史的研究は、これまで世界各國の優れた陶磁學者によつて、尠なからぬ經費と永い月日を經て眞劍に行はれて來たのにも拘らず、未だ完成してはゐないのであります。それ程に北方瓷は複雜蒙昧な問題を多く含み模糊として濃霧に掩はれた處女林の如く眠つてゐるのであります。

東城記 その五

加藤新吉

大君は神といまして神ながら思ほしなげくことのかしこさ

神怒りかくひたぶるにおはします今し斷じて伐たざるべからず

畏くて涙流れぬ神ながら御怒り深み言開きつゝ

この程穪迢空氏から贈られた新刊の歌集「天地に宣る」の首にこの歌がある。大東亞戰爭一周年、宣戰の大詔を拜した朝のあの筆にも口にも盡しがたい感激をふたゝび新にする。

事變五年、戰爭一年、北支は、北京はどう變つたであらうか。或は變らなかつたであらうか。變らないと見る人もある。變つたといふ人もある。

皇軍の南方に於ける赫々たる戰勝が北支の人心に著しい影響を與へたことは事實である。併し、殆ど海を知らぬ大陸民族に、海戰及其戰果のほんたうの意味がわからうとは思はれない。戰艦、空母の擊沈に就いて彼等と話してみても、その刺戟や理解や認識は至つて微弱であり淺薄である。

支那事變が事變であつて戰爭でなかつたことは、日本の實力の行使及其實力に對する認識を不徹底なものにしたと一部の人は考へてゐる。事變は支那人を戰敗者たらしめず、彼等自身現に負けたとは思つてゐないらしい。大東亞戰爭に於ける彼等の立場は頗る朦朧として居る。たゞ何となく魅力のあるのが「最後の勝利われにあり」といふ重慶の宣傳である、と識者はいふ。

事變當初、飛行機の音がすると大急ぎで外に出て空を仰ぐ彼等であつた。蔣軍の飛行機を空頼みにしてゐたのである。この頃、一度、米機が冀東に現はれてからは、また空を仰ぎ始めた彼等である。さういふ意味でなら、人心は大して變つてはゐない。

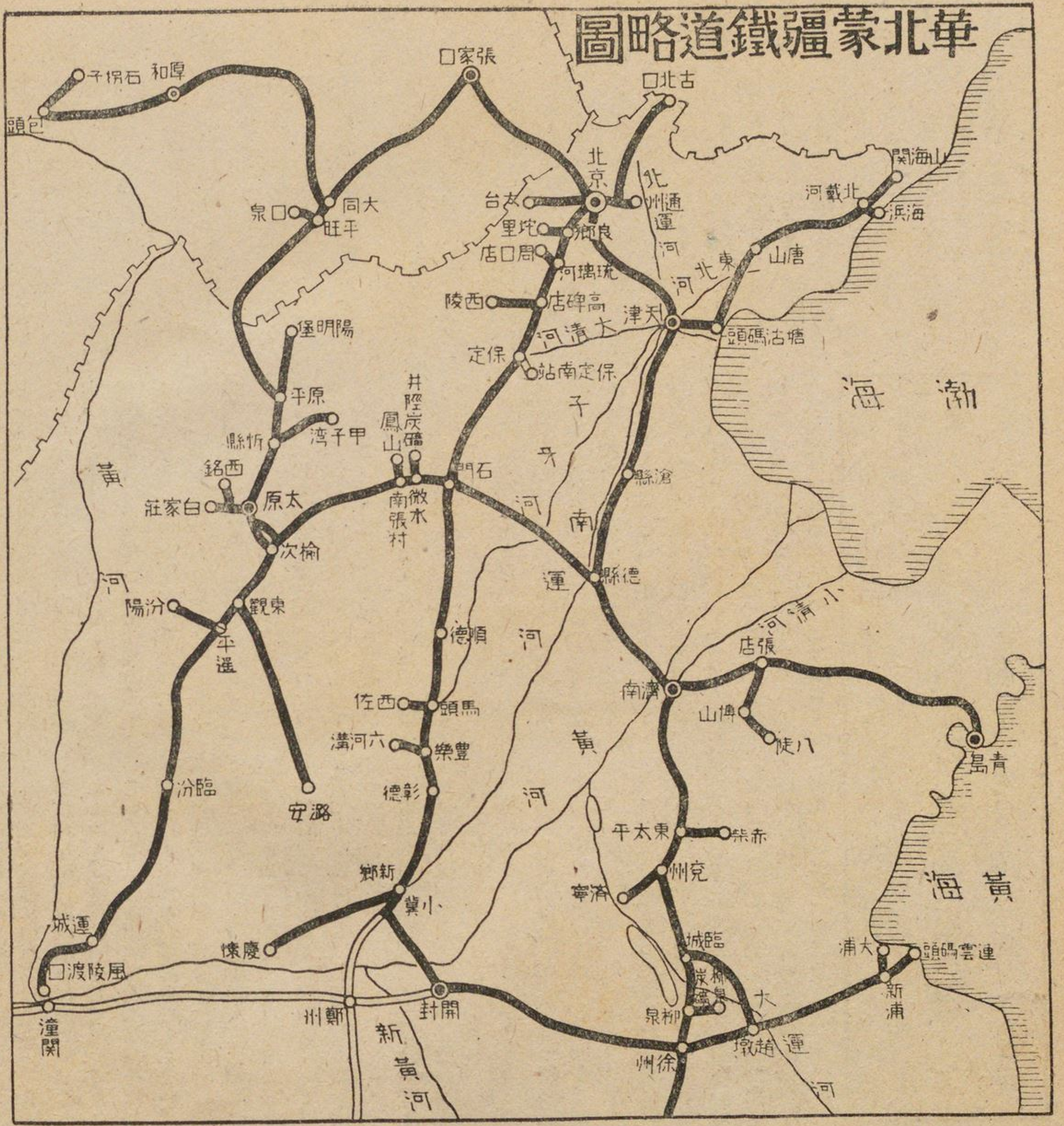
北京の街頭にはまだ物がある。木綿も石鹼も菓子もあると日本から來る人は吃驚する。物がある間は戰爭ではないとも謂へる。が、此頃急速に乏しくなつてきた。物價は鰻上りで止る所を知らぬ。停止も統制も相手が風馬牛の支那人ではきゝめがない。「日本人が來たから生活が苦しくなつた」と彼等はこぼす。この頃では「戰爭だから」と言葉だけは改めた由。言葉は變つても内心はなかなか變らない。

北支の食糧は由來麥粉と雜穀、米は喜ばれない。汪政權下に馳せ參じはしたものゝ、米食に閉口して辭めてきたといふ男も居る。北方人には五斗米を蹴とばす先哲の亞流も珍らしくない。がその亞流先生も麥粉には膝を屈し頭を下げる。開灤炭礦の英人經營者はそのこつを知つてゐた。濠洲と加奈陀から自國船でふんだんに麥粉を運んで、炭掘りを粉まぶしにして、意の如く扱つてゐた。

大東亞戰爭この方、その麥粉が來ない。北支を賄つた英國系の麥粉の杜絕は、かなりの痛ごとである。

腹がへると猫も虎になる。聖戰を說き民族的自覺を促しても、さつぱり通じない連中が多い。だから、厄介である。

猫はまだ虎に變つてはゐない。だが變らないといふ保證はない。霜をふんで堅氷いたる、そんなことを考へねばならぬやうになつただけ旣に變つたといへよう。日本國民の實力の發揮が今切實に要求される。



華北蒙疆鐵道

京山線（北京—山海關）
京古線（東便門—古北口）
京漢線（西便門—小冀）
津浦線（天津北站—蚌埠）
京包線（豐臺—包頭）
膠濟線（青島—濟南）
石德線（石門—德縣）
石太線（石門—太原）
同蒲線（大同—蒲州）
懷慶線（新鄉—懷慶）
隴海線（連雲碼頭—開封）

昭和十七年十二月十五日印刷納本
昭和十八年一月一日發行

一月號（毎月一回一日發行）

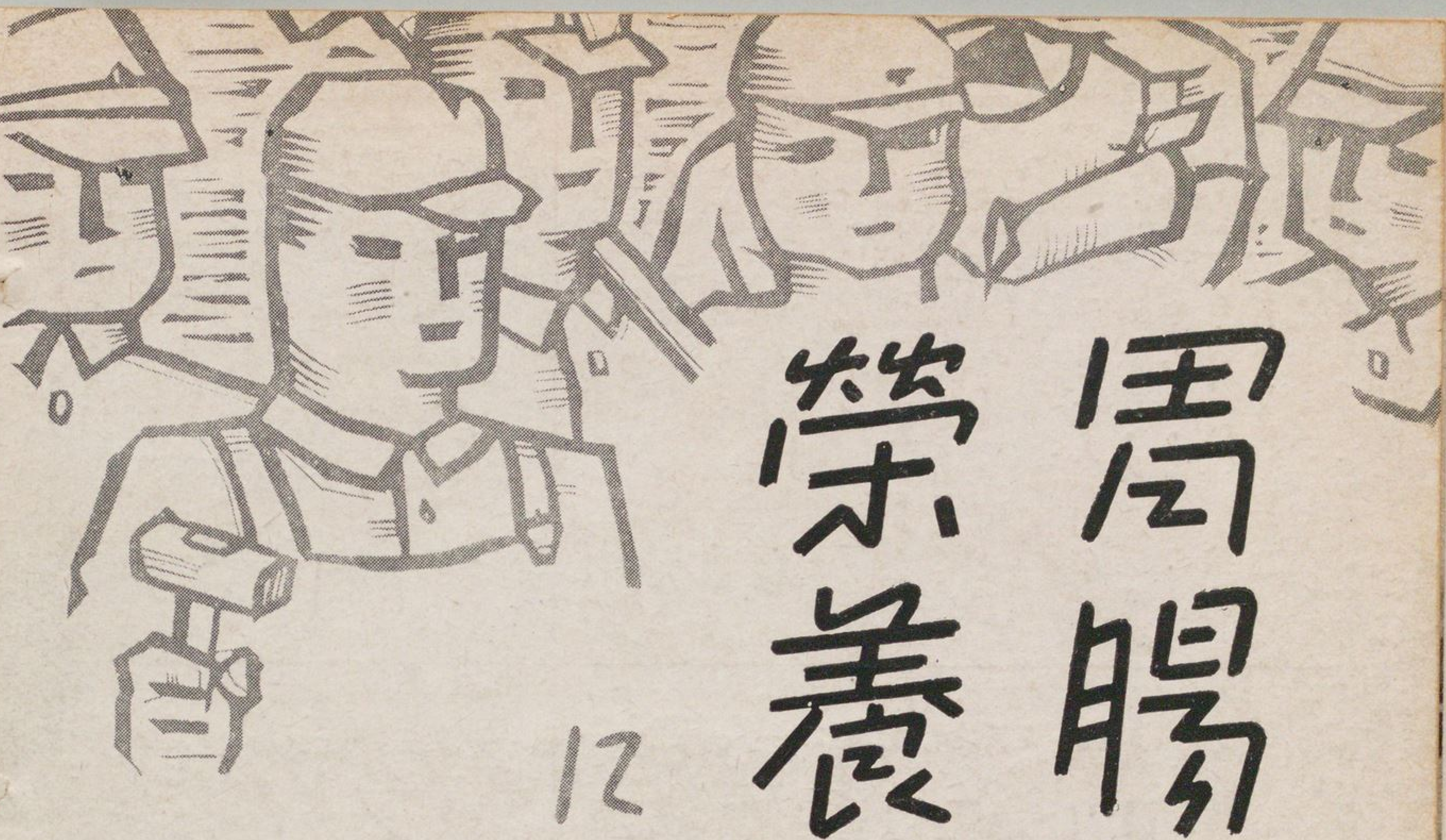
編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麹町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社（東東二〇四） 古川一郎
發行所 東京市麹町區三番町一 第一書房
振替 東京六四二二三番
電話九段(33) 一一四一五番 三三四四番
會員登錄番號 一二一六五〇八番

一册定價㊫三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

禁無斷轉載・檢閲濟

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十七年十二月十五日印刷納本 昭和十八年一月一日發行（毎月一回一日發行）第四十四號



北支 ㊕ 定價 三十錢